

地域に飛び出す 公務員アワード

2 0 1 3

応募集



ときには苦勞もあるけれど、笑顔の瞬間もやってくる！ だからやめられない、とまらない

地域に飛び出す公務員を応援する首長連合

平成26年1月25日

目次

	アワード概要	3
	アワード結果	4
	[No. 101] 加藤 美浩 まちづくり活動 あれこれ	5
	[No. 102] 大越 拓也 釧路鳥取てらこや（現代版寺子屋にて地域で子供を育む活動）	6
	[No. 104] 清水 正隆 「地域に飛び出すパピ」を増やせ！！イクメンからイキメンへ！！	7
	[No. 105] 大西 知芳 京都やましろ環境教育ネットワークの結成と環境教育活動の推進	8
	[No. 106] 大内田 佳介 ナイトツアーから始まった！まち再発見～まち歩きのススめ～	9
	[No. 107] 加藤 博之 音楽で地域を元気に！	10
	[No. 108] 畑 文隆 自主上映会主宰・講演活動により「心をつなぐ」東北復興支援	11
	[No. 109] 服部 しづ子 小学校へご奉公！生き活きと私ができること『おはなし隊の活動』	12
	[No. 110] 小峰 弘明 地域のために働く人を応援するコミュニティビジネスの大家さん	13
	[No. 111] 磯崎 恵美子 子どもを核とした「だかしや楽校@善行」での地域活性化	14
	[No. 112] 倉根 明德 SHIP（シップ）（信州イノベーションプロジェクト）	15
	[No. 113] 入江 嘉則 元気おばちゃん食堂プロジェクト！	16
	[No. 114] 三宅 康裕 業務等での専門性を活かした審議会などへの市民参加	17
	[No. 115] 荒木 征二 ワールド・カフェ『たかさき福ミーティング』で繋がりづくり	18
	[No. 116] 國徳 健二 地域で生まれた歌の普及・継承活動	29
	[No. 117] 桜井 好基 地域での水辺の生物多様性保全並びに方言・諺の記録化等活動	20
	[No. 118] 田口 良実 ①がん患者会 ②高齢者支援の会 ③うつ患者を支援する会	21
	[No. 119] 都竹 淳也 鶏ちゃん合衆国～岐阜県の郷土料理「鶏（けい）ちゃん」振興活動	22
	[No. 120] 毛利 広行 自ら参加し、楽しむことのできる発展型の行政マン中心のNPO	23
	[No. 121] 関本 尚彦 カステラ販売を通じた、高岡の魅力づくり活動	24
	[No. 124] 中谷 英明 ジオパークの海の魅力を伝える活動	25
	[No. 125] 今野 幸樹 成沢小おやじの会代表(創立・企画・活動・発展・継続・飛躍へ)	26
	[No. 126] 中尾 雅幸 学校と地域の連携をテーマに地域に飛び出す公務員活動	27
	[No. 127] 小川 俊明 避難所体験 学校に泊まろう！（火を囲んで防災ワークショップ）	28

	[No. 128] 今崎 泰浩	街さ行こう（街最高）中心市街地買い物ツアーの取組	29
	[No. 129] 山田 浩昭	二輪車の安全運転意識の普及・啓発活動	30
	[No. 130] 前田 耕作	職業の特性を活かしたプロボノワーカーとしての活躍	31
	[No. 131] 瀬戸 要	剣道交流活動、音楽普及活動、PTA及び学校運営協議会委員活動	32
	[No. 132] 前淵 康彦	踊る公務員、ひよっとこ踊りで地域を元気に、自らも健康に！	33
	[No. 133] 原田 靖士	音楽でまちづくり「ご当地ソング制作からロックバンド指導まで」	34
	[No. 134] 浦崎 太郎	豊かな学びの共同デザイン（地域資源と教職的技法のリンク推進）	35
	[No. 135] 明瀬 理恵	聴覚障がい者とともに歩む手話サークル活動	36
	[No. 136] 前島 祐三 ほか	『わこまち探検隊』	37
	[No. 137] 小林 圭一	職業の特性を活かしたプロボノワーカーとしての活躍	38
	[No. 138] 大橋 志帆	居場所と出番のあるまちづくり～NPO活動支援・テレワーク推進	39
	[No. 139] 井上雅平・野間紀子・岡田美千江	みらいづくり委員会残党 地域振興応援団	40
	[No. 140] 澤田 聡美	下総神崎駅イルミネーション事業	41
	[No. 141] 菊原 勇作	週末博物学者-ハタチの夢を形に-	42
	[No. 142] 円城寺 雄介	佐賀県庁アフターファイブ講演会	43
	[No. 143] 樋口 克利	小中学生を対象とした地域の学習支援活動	44
	[No. 144] 山田 崇	空き家から始まる商店街の賑わい創出プロジェクト nanoda	45
	[No. 145] 稲富 正人	地球市民運動（国際交流・協力、地域づくり、青少年健全育成）	46
	[No. 146] 高木 保夫	諏訪湖浄化で一緒に汗と知恵と未来を！～地域こそ教師なり	47
	[No. 147] 林 順和	先輩・仲間とともに「大好き大野・福井」盛り上げています！	48
	[No. 148] 大塚 知幸	栃木市 UVA シンボル化プロジェクト	49
	[No. 149] 鈴木 義久	サル被害軽減のための住民主体情報発信・共有システムの無償運用	50
	[No. 150] 福市 繁幸	障害者・難病患者等地域生活支援活動、特別支援教育の充実活動	51
	[No. 151] 西尾 祥之	地域を知る→人を知る→地域をつくる→「飛び出すプロセス∞」	52

アワード概要

はじめに

公務員が自らの時間を活用して、地域づくり活動や、自治会、PTA、消防団、NPO 法人などの組織のなかで市民の皆さんと一緒に、またときには自らがリーダーシップを発揮して活動している人たちがたくさんいます。

今回、熱い思いで地域に飛び出し、住民と思いを共有しながら地域活動等で活躍している公務員を表彰する“地域に飛び出す公務員アワード”を初めて実施しました。

職場や家庭における役割に加え、プラスワンとして行う社会貢献活動等の優良な取り組みを称賛することで、このような活動をより多くの人に知ってもらい、関心を持ってもらい、活動しやすい職場環境づくり、地域に飛び出す職員を増やし、自治体の組織風土改革のきっかけになることを期待しています。

応募資格

社会貢献活動、地域づくり活動、自治会、PTA、消防団、NPO 法人などの活動に取り組んでいる公務員（他の組織への出向者を含む）。自薦も他薦も歓迎！

応募要件

- 平成 26 年 1 月 25 日（土）に千葉県山武市で開催される首長サミットでの発表（20 分程度）が可能であること（録画動画による発表も可）。
- 応募資料を 1 次審査のために公開すること及び応募集として取りまとめてホームページ等で公開することに同意すること。

審査について

（1）審査プロセス

エントリー期間	ウェブ投票	審査委員審査	発表・表彰
09 月 20 日（金） ～10 月 19 日（土）	11 月 06 日（水） ～11 月 19 日（火）	11 月 20 日（水） ～12 月 25 日（水）	01 月 25 日（土）
全国から募集	投票により 10 名を選出	4 名を選出	第 3 回首長連合 サミット in 千葉にて 発表・表彰

（2）審査の方法

【一次審査】（ウェブ投票）

- ウェブ投票期間中に獲得した“いいね”の数の上位 10 名を選出
- 投票総数は、14,829 票（11/19 〆切時点）

【二次審査】（審査委員審査）

- 一次審査で選出された 10 名について、下記 5 つの審査基準（各基準 10 点満点）に基づき下記 4 名の審査委員が採点（配点 10 点×基準 5 項目×審査委員 4 名＝200 点満点）し、合計点の上位 4 名を選出

（3）審査基準

- 成果・効果…活動を通じて、応募者が、地域の課題解決や活性化などにどれだけ貢献しているか
- チャレンジ性…応募者のノウハウやアイデアなどを活かし、変革・改善に富んだ活動となっているか
- 波及性…活動内容が、他地域や他分野など、また公務に対して波及する活動となっているか
- 協働性…活動を通じて、多様な主体が、互いにノウハウなどを出し合った活動となっているか
- 継続性…活動期間の長短ではなく、応募者の取組により、持続可能な活動となっているか

(4) 審査委員（敬称略）

- 市民委員 早瀬 昇（社会福祉法人大阪ボランティア協会常務理事）
- 飛び出す公務員委員 生水 裕美（滋賀県野洲市職員）
- 首長連合賛同者委員 椎川 忍（一般財団法人地域活性化センター 常務理事）
- 首長連合首長委員 谷畑 英吾（滋賀県湖南市長）

主催

地域に飛び出す公務員を応援する首長連合

協力

山武市

アワードと首長連合のウェブサイトの紹介

アワード特設 HP <http://t-k-award.sakura.ne.jp/>

首長連合 HP <http://tobidasu-rengo.blogspot.jp/>

アワード結果（敬称略）



一次審査通過者

[No.102] 大越 拓也 釧路鳥取てらこや（現代版寺子屋にて地域で子供を育む活動）

[No.112] 倉根 明德 S H I P（シップ）（信州イノベーションプロジェクト）

[No.119] 都竹 淳也 鶏ちゃん合衆国～岐阜県の郷土料理「鶏（けい）ちゃん」振興活動

[No.131] 瀬戸 要 剣道交流活動、音楽普及活動、PTA及び学校運営協議会委員活動

[No.134] 浦崎 太郎 豊かな学びの共同デザイン（地域資源と教職的技法のリンク推進）

[No.142] 円城寺 雄介 佐賀県庁アフターファイブ講演会

[No.144] 山田 崇 空き家から始まる商店街の賑わい創出プロジェクトnanoda

[No.146] 高木 保夫 諏訪湖浄化で一緒に汗と知恵と未来を！～地域こそ教師なり

[No.148] 大塚 知幸 栃木市 UVA シンボル化プロジェクト



アワード受賞者

[No.102] 大越 拓也 釧路鳥取てらこや（現代版寺子屋にて地域で子供を育む活動）

[No.119] 都竹 淳也 鶏ちゃん合衆国～岐阜県の郷土料理「鶏（けい）ちゃん」振興活動

[No.144] 山田 崇 空き家から始まる商店街の賑わい創出プロジェクトnanoda

[No.146] 高木 保夫 諏訪湖浄化で一緒に汗と知恵と未来を！～地域こそ教師なり

加藤 美浩 (北海道 札幌市)

○コミュニティ FM による地域コミュニティの再生

・NPO 法人「さっぽろ村コミュニティ工房」「さっぽろ村ラジオ」の設立へのかかわりと、番組「SWINGKATO のあれこれどれどれ」パーソナリティ

○音楽によるまちづくり

・「アマチュアバンドコミュニティさっぽろ」の設立と運営

○新たな手法による結婚支援と高齢者の生きがいづくり

・NPO 法人「全国結婚・家庭未来塾」の設立へのかかわりと運営

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

高校卒業後、民間設計事務所を経て、24 歳で札幌市職員になったが、民間零細企業に比べて、時間的余裕がある公務員生活の中で、個人としての社会貢献の必要性を感じ、市民活動をはじめた。建築士会青年委員会を皮切りに、地域のまちづくり活動へ参加するようになる。それらの活動の中で得た知識やスキル、人脈は、さらなる活動の広がりにつながっていった。現在では、まちづくりに関する講演や、地域のまちづくりにアドバイザー的に関わることも多くなったが、やはり、自分自身が活動していくことが大切であると感じ、いつも「なんかオモシロイことないかなあ・・・」と考えながら日々を送っている。

アピールポイント

○NPO 法人「さっぽろ村コミュニティ工房」「さっぽろ村ラジオ」

(1)成果・効果

NPO では 150 人もの放送ボランティアを養成。地域の FM 局として認識・定着している。

(2)チャレンジ性

NPO 主体でのコミュニティ FM は当時、他に例がなかった。

(5)継続性

開局 11 年目を迎えた。現在は NPO は解散し、ラジオ局は株式会社として運営しているが、「まちづくり放送局」のコンセプトは変わっていない。自身の番組「SWINGKATO のあれこれどれどれ」も開局以来 11 年目、放送回数は 530 回になる。

○「アマチュアバンドコミュニティさっぽろ(ABC-SAPPORO)」

(1)成果・効果

これまでに関わった音楽イベント等は 100 を超え、参加ミュージシャンは 1000 組を超える。

(2)チャレンジ性

同様の活動を行っている個人や団体は他にない。

(4)協働

地域の各施設や民間の老人福祉施設との連携ができてきている。

(5)継続性

設立 15 年を迎え、年々事業数は増加している。



no1012



no1013

○NPO 法人「全国結婚・家庭未来塾」

(1)成果・効果

設立したばかりなので、目に見えた成果はないが、市民や行政、メディアの関心は高いものと思われ、多くの問い合わせを受けている。

(2)チャレンジ性

同様の活動を行っている個人や団体は他にない。



音楽イ〜1 (1)



[No. 102] 釧路鳥取てらこや（現代版寺子屋にて地域で子供を育む活動）

大越 拓也（北海道 釧路市 市立釧路総合病院 事務医事課）

町内会・PTA・保護司・民生委員・教師・医師・弁護士等の有志にて子供達を見守りながら、生活に必要な知識や遊びを教えたり、学習のサポートをする取り組みを昨年4月から集会所にて実施。活動を通して子供の居場所作り、3世代交流、地域の活性化にもなれればと考えています。活動は毎週土曜午前（年中無休）、市内の子供達（幼稚園児から中学生）を対象。今年度は市内の子供達を対象に、小学校を借りて検定試験も開催します。



てらこや

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

2008年の春、娘が私の母校でもある小学校に入学。それまでボランティア活動には縁の無い生活をしていましたが、「母校に恩返ししたい!」という想いで、小学校の「おやじ会」に自ら入会。おやじ会のメンバーにPTA会長（職業は神社の宮司）がおり気が付くと、その年から神社の役員、翌年にはPTA副会長、2010年から現在までPTA会長を4年務めております。2年前、小学校の冬休みの補習授業を見学。3年生の教室で問題が分からず手を挙げている児童がいました。先生の許可をもらいその児童の答案用紙を見せてもらいました。何と、一ケタの繰り上がりの足し算（8+7など）が出来ていなかったのです。これには大変驚きました。「あの子の将来のために何とかしてください!」と校長に訴えましたが、校長は「既定の時間では対応できない。他にも問題を抱えている児童は多数いるので特別扱いできない」と回答。「ならば、子供達の為に地域で立ち上げよう!」と、地域に呼びかけ有志を募り、昨年の4月に「てらこや」を立ち上げました。立ち上げから1年経ちました。今年は、市内の全児童を対象に日本数学検定協会の算数検定を開催します。

アピールポイント

・主なボランティア活動

釧路鳥取てらこや 代表、北海道移植医療推進協議会釧路支部事務局、鳥取神社役員、市PTA連合会 副会長、市立鳥取小学校PTA会長、市立鳥取小学校おやじ会会員、釧路の未来を考える会会員、釧路の教育を考える会会員、鳥取4丁目町内会会員

・「てらこや」について

2011年3月11日の東日本大震災以降、子供達と地域の結びつきの重要性が再認識されてきました。子供達と地域との繋がりが何かの災害の時でも助け合う事が容易になります。その為には、平時にいかに地域的な結びつきを築けるかが重要です。そして、子供達は次世代の社会を担う地域の宝です。そこで私達は、町内会・PTA・民生委員等の有志にて『地育』（地域全体で子供を育む）事業を2012年から「てらこや」の名称で始め、子供達と地域の交流の場となる事を目指しております。今年度は、文部科学省の外郭団体である「早寝早起き朝ごはん全国協議会」の土曜朝塾支援事業の支援を受けることになり、この活動を広く知ってもらうべく団体名を「釧路鳥取てらこや」に変更。また今年は、市内の児童を対象に小学校を借りて日本数学検定協会の算数検定を開催します。（道内初の試み）検定の目的は、①基礎学力の向上、定着を図る。②自ら目標を設定し、主体的に学習活動に取り組む姿勢を育成する。③算数嫌いの軽減、学ぶ楽しさを実感してもらう。

・釧路の未来を考える会について

毎月、フリージャーナリストの中村美彦氏を講師に迎えて地元釧路の経済、教育、医療等多岐にわたる問題について経営者や公務員、会社員、弁護士、医師、教員などの有志が集まって勉強会を開催。更にそこから発展してパルク港の誘致署名を提案して市民を巻き込んだ署名活動に発展したり、学力低下問題解決の一助となるべく有志が動いて寺子屋を実現させたり、議論だけでなく具体的に動くを旨として活動が続けています。



201304 釧路新聞



20130905 釧路新聞

[No.104] 「地域に飛び出すパパ」を増やせ！！イクメンからイクメンへ！！

清水 正隆（東京都 板橋区 福祉部 障がい者福祉課）

練馬イクメンパパプロジェクト（通称：ねりパパ）という父親の育児支援団体の設立メンバーとして参画、副代表として活動に従事。現在約 50 名のパパが参加。今年度副代表を辞め、同団体の中で、子ども虐待防止プロジェクトを立ち上げ運営。土日休日に、児童館や商店街、地域のお祭りなどで絵本ライブ等を開催。その他、教育委員会のイクメン講座の受託、子ども虐待防止オレンジリボン活動支援団体としてイベント開催等を行う。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ



お祭り

【きっかけ】平成 22 年、長男の誕生、自宅購入を機に、地域に関わろうと思って矢先、ねりパパ代表と出会い、活動に参画、副代表就任。

【現在までのあゆみ】平成 22 年…設立メンバー 5 名とその家族で活動開始。児童館等での絵本ライブを開始、毎月実施。教育委員会の委託講座を受託。
平成 23 年…福祉部、社会福祉協議会から助成金を得て活動を拡大。絵本ライブを定期開催する児童館等が 5 ヶ所に。
平成 24 年…子ども虐待防止オレンジリボン支援団体に登録。絵本ライブを定期開催する児童館等が 8 ヶ所に拡大。隣の板橋区の児童館でも絵本ライブの定期開催を開始。団体として年間約 100 回のイベントを実施。これらの活動を経て、国立女性教育会館主催「家庭教育・次世代育成指導者研修」分科会「男性の子育て支援活動への参画」で事例報告を行った。
また「第 6 回よみうり子育て応援

団大賞奨励賞」を受賞。

平成 25 年…保健相談所と連携を開始し「パパのメタボ対策」「パパとママの準備教室」に出演。オレンジリボン共催イベントを受託し、子ども虐待防止イベントを開催予定（11/3）。子ども家庭支援センターとの連携を構築中。

アピールポイント

【成果・効果】設立から 3 年半の間に開催したイベントは 200 回超。参加メンバーは近隣在住のパパが約 50 名に拡大。絵本ライブを定期開催する児童館等は 10 ヶ所となり着実に地域へ浸透。また障がい者施設や児童養護施設のお祭り等にも出演し、パパが家事育児のみならず、子育てを通じて地域に関わる機会を多数創出し、より良い地域づくりに貢献。

【チャレンジ性】厚生労働省が、男性の子育て参加や育児休業取得の促進等を目的とした「イクメンプロジェクト」を立ち上げたのが平成 22 年 6 月。同時期に活動を開始して以来、地域で活動する父親の育児支援団体としてはロールモデルのない中で、代表をサポートし活動を推進、拡大した。メンバーは土日しか会えない中、メールや SNS を活用してコミュニケーションを取り、活動の 프로모ーションを行っている。

【波及効果】設立当初、2 ヶ所で開始した絵本ライブの定期開催は、口コミで広がり 3 年半で 10 ヶ所に拡大した。また練馬区に留まらず、板橋区、足立区、杉並区の児童館やイベントからも出演オファーがある等、活動は広がり続けている。

【協働】練馬区の福祉部、教育委員会、図書館、保健相談所、子ども家庭支援センター等、行政機関と幅広く連携。PTA など区内の様々な団体や、Fathering Japan 等、全国各地のイクメン団体と交流。児童虐待防止全国ネットワークとも連携し、オレンジリボンの啓発を行っている。

【継続性】土日に開催する絵本ライブは、毎月定期的に開催することを基本としている。近所に住むパパがそれぞれ担当することで負担を軽減し、継続を可能にしている。また「家族第一」として、子どもの急な発熱等の際には当日キャンセルもあることの理解を得ながら活動している。



児童館



集合写真

[No. 105] 京都やましろ環境教育ネットワークの結成と環境教育活動の推進

大西 知芳（林野庁 近畿中国森林管理局 奈良森林管理事務所）

職務を通じて実施してきた森林環境教育活動を自身の居住地域に広げるとともに、森林だけでなく環境教育一般も含めて活動を展開するために、京都府南部で環境教育活動を行う小規模団体に声をかけ、京都やましろ環境教育ネットワークを結成。「人・自然・地域を愛する人づくり」をコンセプトに、出張教室、人材育成事業、ネットワーク交流、各種イベント出展などを実施。また、京都・環境教育ミーティング等にも実行委員として参画中。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ



ネットワーク交流（やま環カフェ）開催

職務を通じて実施してきた森林環境教育活動を自身の居住地域に広げるため、地元森林インストラクター会に所属して活動を開始。森林だけでなく環境教育一般も含めて活動を展開するために、京都府地球温暖化防止活動推進員への応募や自然体験活動推進協議会公認トレーナー、気象予報士等の資格取得を通じて自身のスキルの向上を図るとともに、とある環境教育指導者養成研修において、自身の居住する京都府南部での環境教育活動の問題点を考えることとなり、活動は活発であるが各団体がバラバラで、横のつながりがなく、スキルアップのための研修の機会がないなどの問題点を有志と共有。そこから、環境教育活動を行う小規模団体に声をかけ、平成24年6月に京都やましろ環境教育ネットワークを結成し、初代会長に就任。

現在、6団体と個人参加4名で緩

いネットワークを構成、「人・自然・地域を愛する人づくり」をコンセプトに、出張教室、環境教育指導者養成事業、ネットワーク交流（やま環カフェ）、各種イベント出展などを行っている。また、京都・環境教育ミーティングや里山フォーラム等の実行委員に就任し、環境教育活動の普及と深化の支えとなるよう活動を展開している。



環境教育指導者養成研修会の実施

アピールポイント

- (1)京都府南部の環境教育系団体のネットワーク化と情報交換の場やスキルアップのための研修の機会の提供が可能になった。特に、各団体間が顔の見える関係になりつつあり、災害に強い自然学校系団体の特徴を活かして、市町村の枠を超えた災害時の協力体制の構築や、お互いのイベント等での協働、指導者の融通等が生まれてきている。
- (2)森林インストラクターや自然体験活動推進協議会公認トレーナーなどの資格を活かして環境教育指導者養成の講師やイベント出展などを行った。特に、自然体験を通じた参加者の変化について京都・環境教育ミーティングで事例紹介したほか、本年度は実行委員として参画し、当該テーマでセッションを予定している。さらに活動を関西域に広げるため、里山フォーラム2014にも実行委員として参画している。
- (3)ネットワーク化を促進するための「やま環カフェ」が、南河内まーぶるカフェや和束町の出張カフェとして実施されたり、環境イベントでの展示手法が木津川市環境まつりに採用されるなど活動が波及しつつある。また、自身の活動が職場でも認められ、森林整備活動等に関する地域協働の企画を行ったり、管轄する国有林で森林環境教育プログラムを作成したりしている。
- (4)京都やましろ環境教育ネットワークは団体・個人の集まりであるので、ネットワークの使命である「人・自然・地域を愛する人づくり」を行うためのアイデアを出し合って事業を進めている。また、城陽市緑化まつりや京都・環境教育ミーティング、里山フォーラムなどの実行委員会でも多くの主体と企画を協働している。
- (5)立ち上げた団体の継続性と社会的信用を得るため、会則を策定し、年度毎に決算月に1回運営委員会を開催し、将来のNPO法人化を見据えて活動を実施している。また、会長職を1年で地元活動家に譲り、転勤の多い国家公務員は裏方へ回ることによって持続可能な運営を目指している。



森林インストラクター活動を実施

[No. 106] ナイトツアーから始まった！まち再発見～まち歩きのススメ～

大内田 佳介（福岡県 北九州市 産業経済局 企業立地支援部 企業立地支援課）

私が「北九州市（小倉）のまちのにぎわいをつくりたい」と考え、夜のまちの魅力発信をテーマに 2007 年に NPO などの有志で活動を開始した「北九州ナイトツアー」は、公共施設の夜間開放イベントや、路地裏や角打ち、地産地消の食事を楽しみまち歩きが好評を得た。現在はまち歩きを通して、市民が「まちの魅力を再発見」し、「シビックプライド」の醸成につながる、体験型まち歩きやまちのナビゲーター養成講座を行っている。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ



代表ガイド風景

私は、市役所より 1 年間東京の省庁へ派遣されてときに、今まで市内に住んでいて気づけなかった「本市のまちの魅力」（都心部に海や山が近接しており自然が身近に感じられる、海や山の幸が豊富である、適度な人口規模など）を感じ、このまちの魅力をもっと発信して多くの方にまちに訪れてもらいたい、また、市民の方が「何もないうまち」と言わずに「私のまちはこんなにいいところがあるんですよ」と誇りをもってもらいたいと思うようになった。その後、帰郷し、妻が活動していた青年がまちづくりを行っている NPO に入会し、まちづくりイベントに携わることで、まちの方との交流の楽しさ、仕事（土木職）では経験できない感動を覚えた。そして、NPO の役員就任を機に、「公共施設が充実したまちなのにあまり利用されていない、夜のイベントをきっかけにまちを訪れ、まちや施設の魅力に気づいてもらえるのでは」と考え、ナイトツアーをはじめた。現在は、ナイトツアー（夜のまち歩き）だけではなく、市への転入者向けの「ようこそ北九州ツアー」や親子でまちなかエコを体感する

「親子ツアー」など様々なまち歩きツアーでまちの魅力を発信している。

アピールポイント

（1）成果・効果

＜受賞＞○ふくおか地域づくり活動賞グランプリ（知事賞）（H22 年）

○ふくおか共助社会づくり表彰（地域貢献活動部門賞）（H24 年）

＜成果＞○「北九州ナイトツアー」を開始（H20 年）。イベント「よるカフェ」は北九州市立小倉城庭園初の夜間開放イベントとなり、以降当団体と連携し、夜間開放イベントやまち歩きを開催し、来館者数が増加した。

○「北九州ナイトツアー」（夜のまち歩き）参加者が 1,000 名達成

（H24 年 3 月）（西日本新聞夕刊一面に掲載される）し、まちの魅力を PR 及び交流人口の増加に寄与することができた。○これまでの取り組みを発信し、北九州市制 50 周年を迎える記念の年に、まち歩きの全国大会「第 3 回日本まちあるきフォーラム IN 北九州」の誘致に成功し、H25 年 10 月 5 日、6 日に開催し、全国各地から約 300 名の方が参加し、本市のまちの魅力を発信することができた。

（2）チャレンジ性 市内初の夜のまち歩き「北九州ナイトツアー」や近代化遺産の施設を紹介する「イノベーション+ナイトツアー」や市内の転入者を対象にした「ようこそ北九州ツアー」、環境モデル都市を身近に感じてもらう「親子でエコツアー」や「サイクルツアー」など市内で取り組まれていないツアーを実施してきた。

（3）波及効果 当団体のまち歩き講座を受講した団体の方々から門司や八幡といったエリアでまち歩きを開始するなど、まち歩きでの集客やシビックプライドの醸成が進んでいる。

（4）協働 北九州市初の NPO との協働事業「着地型観光」（H22 年、H23 年）を実施。

（5）継続性 H19 年「北九州ナイトツアー実行委員会（北九州青年みらい塾内）」を設立、現在、NPO 法人北九州タウンツーリズムとして活動を継続中。



講演 1



庭園集合写真

[No. 107] 音楽で地域を元気に！

加藤 博之（三重県 伊勢農林水産事務所 農政室 農業振興課）

仕事がきっかけで御浜町尾呂志地域の農家さんたちと親しくなり、趣味の音楽が高じて毎年音楽会を開いています。当初は過疎地域を応援する気持ちもありましたが、今では逆に元気をもらいに演奏しに行くような状態です。

もともと農家さんたちのグループが熱心だったため、組織立ち上げの平成 19 年度以降、年々地元の動きも活発になり、多方面へ広がりを見せています。この音楽会もその柱の一つとして好評を博しています。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

県に就職し 7 年目に紀州地域に異動になり、はじめて農業の現場担当（農業改良普及員）になりました。主に水稻や小麦の栽培指導や「集落営農」の推進が業務内容でしたが、三重県南部の紀州地域は特に過疎化の進んだ地域で、あちこち現地を歩くと本当に山にのまれてなくなってしまいそうな集落もありました。県内でも地域によりさまざまな状況がありますが、感覚的には、山間地や過疎地域であるほど田んぼと地域のつながりが深く、田んぼを維持することがそのまま集落機能や集落そのものの維持につながっていると感じました。

そんな中、御浜町の尾呂志という地域で、ある農家さんのグループと出会い水稻栽培の技術指導などを行う過程で、尾呂志『夢』アグリという組織立ち上げにも携わることができました。特にこのグループの方は熱心で、すぐに打ちとけて個人的にも親しくなりました。今振り返ると、そのグループから忘年会に誘われ、その場で趣味のピアノを弾いたのがこの活動の始まりだったと思います。

異動でこの地域を離れた後もおつきあいが続き、気の合う楽器仲間にも呼びかけて、バイオリンやチェロ、フルートなどと一緒に音楽会を企画することになりました。



お客さんの様子

アピールポイント

(1) 成果・効果、(2) チャレンジ性、および (3) 波及効果

これまでに 3 回の演奏会を行い、毎回大変喜ばれています。普段は座談会などを開いても 20 名ほどしか集まらない地域ですが、当日は地区内外から 100 名以上お越しいただき、ひとつの大きなイベントとして定着してきました。主催は前述の尾呂志『夢』アグリさんで、「農業だけではなく文化的なことにも取り組んで地域を元気にしたい。」とご協力をいただき、会場借り上げやチラシ配布など主体的に動いていただいています。『夢』アグリの皆さんや農産物直売所「合同会社さざり」の皆さんが中心となって「地域活性化プラン」（県の事業）に取り組み始めたおかげで、尾呂志地域は今とても活気づいており、共同の農機を導入したり、直売所に漬物加工所を増設したり、地元の歳時記を作ったりと紀州で最もホットな地域の一つに発展しています。ただし、あくまで主役は地元の方であり、いくつかの取り組みの一つが音楽で、こちらはその応援をさせていただいているという感覚です。また、県内の別の地域でも、かつて仕事でお世話になった、平均年齢 80 歳のおばあちゃんたちの朝市グループへお礼の演奏会を企画したり、地元子供会のクリスマス会で演奏したりすることも企画しています。



演奏の様子



打ち上げ

(4) 協働 音楽会そのものは比較的限られたメンバーが主体ですが、活動の輪が広がり、学校、直売所、防災など地域全体をまきこんで様々な分野の方が動いています。

(5) 継続性 室内楽のメンバーも喜んで参加しており、紀州の方と会えることを毎年楽しみにしています。一方の尾呂志の方たちも主体的に動いていただいています。お金がからむわけでもなく、補助事業などとも違い、自主的な取り組みとなっていますのでこれからも続けていけると思います。近いうちにオーケストラのメンバーにも輪を広げ演奏会を盛り上げていきたいと考えています。

[No. 108] 自主上映会主宰・講演活動により「心をつなぐ」東北復興支援

畑 文隆（兵庫県 西宮市 都市局 開発指導課（元：宮城県 南三陸町 復興事業推進課））

「ふるさとがえり」、ドキュメンタリー映画「うたごころ 2011」の自主上映会の企画・実施により東日本大震災被災地での人の心、そして東北復興を支援する人の心をつなぐきっかけをつくる活動。「ふるさとがえり」は役場在職中に南三陸町で 2012.8 に開催。「うたごころ 2011」は甲南大学の協賛も得て、西宮市で 2013.2 に開催。また、復興計画と被災地支援について伝える講演活動を継続しています。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

■私は、西宮市から派遣され 2011.6～2012.9 まで宮城県南三陸町役場で震災復興事業にかかる計画策定や合意形成を担当していました。

■仕事でハード面の復興まちづくり計画策定をする一方、ソフト面「心の復興」に何かお役に立ちたいと思い、町の若手職員と「ふるさとがえり」上映会を開催しました。震災で町を離れた人も多く、古里を考える機会になればと来場を呼び掛けました。約 130 名参加。「町の昔の記憶や、震災前の景観も思い出させてくれる。いろんな角度から古里を考えるきっかけになった。ありがとう。」と感想をいただきました。

■2012 年 10 月、任期を終え西宮市に復職しましたが、被災地への思いの風化を感じ、関西に居ても東北復興を支援できないか考えました。それは、まず自分が「被災地のことを忘れない」こと。そして被災地の現状や今後の支援をまわりに「伝えること」。職場、学会、大学、高校等で南三陸町のことについて 20 数回の講演。また南三陸町等で撮影されたドキュメンタリー映画「うたごころ」の自主上映会を主宰。西宮で 13 年 2 月に開催、約 210 名参加いただきました。



20120808kahoku

アピールポイント

(1)効果・成果 南三陸町「ふるさとがえり」上映会では、地元の方を初め東京や仙台から映画会に参加していただいた多くの方と「ふるさと」への思いを共感できました。また「うたごころ」では多くの方に共感・ご支援をいただき、南三陸町復興基金へ寄付金を持参できました。

(2)チャレンジ性 自主上映会は、PR が弱く参加者数が採算ラインを下まわれば主宰者は自己負担も覚悟しながら企画・開催します。しかし多くの方の賛同・感動をいただき被災地への金銭的な支援までつながると本当にやりがいがあります。

(3)波及効果 「うたごころ」上映会に参加された方が、当方に開催方法を聞かれ、実際に大阪でも開催につながりました。また、映画がきっかけで東北被災地を訪れた方もいらっしゃいます。

(4)協働 上映会は多くのスタッフの協力や志なくしては成功できません。企画立案から実施、後片付けまで有志、チームで心をあわせて動くことに喜びを感じます。

(5)継続性
・講演活動

「南三陸町の復興計画と被災地支援」等についての講演活動は、機会をいただける限り続けます。来年 1 月 11 日には地元（神戸東灘区）の小学校 5 年生対象に防災のことをテーマに講演します。阪神・淡路大震災と東日本大震災の被災状況の違いと避難行動。自分の身をまもること。助けあうことの大切さを伝えます。

・自主上映会主宰

南三陸町の「人」を伝えるドキュメンタリー映画には他に「ガレキとラジオ」があります。「うたごころ」も続編 2012 年版が制作されています。今後も有志を集めて上映会を企画・実施していきます。



20130220flyer



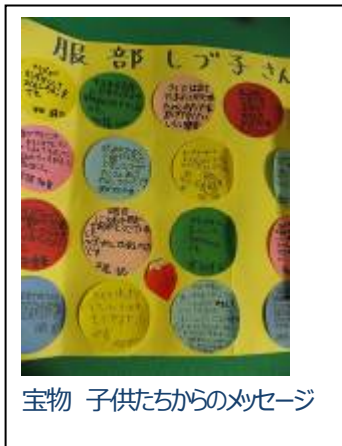
130218【うたごころ】神戸新聞

[No. 109] 小学校へご奉公！生き活きと私ができること『おはなし隊の活動』

服部 しづ子（三重県 津農林水産事務所）

- ・地元小学校へ読み聞かせのボランティア活動（平成 15 年～現在に至る）
 - ・地域ふれあい集会への参加
 - ・出前授業 テーマ『地域の達人』（平成 24～25 年）
- 「総合的な学習 国語」で当地区在住の作家の紹介とその作品の読み聞かせ

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ



宝物 子供たちからのメッセージ

私は、未っ子が小学校 4 年生の時、当時の担任の先生と意気投合し、初めて学校で子供達に読み聞かせをした。3 人の我が子等がお世話になった小学校に何か私でできることがあればと思ったのがきっかけである。当初は私達 3 名の児童の母親のみの取り組みで、内容は子供達が興味を持ってくれそうなお話や紹介したい絵本、紙芝居等を各自で選択し始業前や昼休みの 15 分間の読み聞かせでスタート。現在では 14 名の地域の方たちが読み手に登録され各々で活動を展開、また『おはなし隊』としては年に 1 回開催される学校行事『地域ふれあい集会』にも参画している。おはなし隊のメンバーは自主的で主体性があり、行事の事前の打ち合わせで、子供達に読ませたい、伝えたい本について検討し内容を組み立てている。私は介護のため参加できないこともしばしば・・・。そんな状況下でも、参加を強制されないため、気持ちを楽にして活動を現在まで継続しており、来る 10 月 29 日に前出授業を実施する。私はこの活動を通して子供の卒業後も地域や学校と繋がることができ、また、いろいろな方達との出会い 繋がることでより地域を知ることができた。

アピールポイント

(1) 成果・効果

* 「おはなし隊」の花の一期生

私たち本好き 3 人の同級生の子を持つ母親 3 名でスタートした読み聞かせの活動も現在は地域の高齢者や卒業した児童の保護者の加入もあり 14 名に増加。地域ぐるみで取り組む学校行事『地域ふれあい集会』でも読み聞かせを実施。

(2) チャレンジ性

* 音楽とコラボした読み聞かせ

子供達が喜ぶ内容にするにはどうしたらよいか悩み市内で読み聞かせを定期的に行われるグループの関係者に聞き取りしたり、実際に読み聞かせの場に参加させてもらった。そこでヒントを得て、楽器を取り入れた「音とお話がコラボした読み聞かせ」を思いつき早速、ピアノの指導者である知人の協力を得て楽譜、シナリオを作成。我が子も巻き込み 6 年生の音楽好き有志と一緒に 1、2 年生に読み聞かせを行ったことはよき思い出。

* 読み聞かせの知識、技術向上のための大学の公開講座を受講

自分でやるべき取り組みの一つとして、読み聞かせのブラッシュアップのため某大学の夏期公開講座を受講。県外で読み聞かせを実践する仲間と出会い、彼女らの取り組みを通して、自分自身の今後のライフワークに読み聞かせを取り入れたいと改めて感じた。

(3) 波及効果 私たち母親有志でスタートした読み聞かせの取り組みも今では『おはなし隊』の活動として学校関係者の中で認知されている。会員も増加し年代は 30 から 60 歳代と幅広い地域の皆さんの加入がある。

(4) 協働 この取り組みは地域の方達や学校の先生の理解と協力があってこそその活動。

(5) 継続性 この活動も今年で 10 年目を迎える。途中、介護で気持ちに余裕がなくなったが、年 1 回の参加を目標に変更することで気持ちを楽にしたらまた継続することができた。今後も地域の皆さんと繋がりを継続していきたい。



公開講座修了証



南小読み聞かせ

[No. 110] 地域のために働く人を応援するコミュニティビジネスの大家さん

小峰 弘明 (埼玉県 総合リハビリテーションセンター)

小峰さんは、さいたま市内の空家となっていた実家と土地を地域に提供、そこでは、コミュニティカフェ・高齢者が働く物作り工房・共同オフィス・レンタルサロンを地域の人達が運営しています。子育てママ・早期リタイアの男性・一人暮らしの高齢者など、年齢や立場を超えた人々の交流から新しい付加価値が生まれています。土地建物を提供するだけでなく、彼らの挑戦が進展するよう、企画提案や情報発信にも積極的に参加しています。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

小峰さんは、埼玉県庁で子育て支援や高齢者支援の仕事をする中で、地域で誰もが気軽に立ち寄れる「居場所」や「交流の場」が必要だと感じていました。そんなとき「コミュニティレストラン」の構想をつづった小論文とその筆者との出会いがありました。そして、「行政仕事の枠で考えていては、居場所づくりをいつやれるかわからない。自分でやってみよう!」と一念発起、2009年、実家の土地にコミュニティカフェ「ヘルシーカフェのら」を建設、大家さんとなりました。カフェの店主は、この着想のきっかけとなった小論文の筆者です。さらに2011年、高齢者が働ける物作りの職場「BABAラボ」の主宰者と知り合い、カフェ隣の空家となっていた実家を利用した工房が開業、翌年には工房2階に共同オフィスとレンタル



カフェのお祝いに集まった方々と



夏祭りは地域のババたちも参加

サロンもスタートしました。入居者や利用者たちはここで働いたり、いきがいを見つけたり、交流を深めたりしながら、地域でのネットワークを広げています。最近では、入居者が編集した地域情報紙の発行や夏祭り等のイベントを開催、大家さんの実家と土地を拠点とし、顔の見える地域コミュニティが広がっています。また行政や学生の視察も多いです。

アピールポイント

(1)成果・効果

・カフェ：店舗に年間のべ4500人が来店。魅力は地元産の野菜を使い丁寧に作る食事、来店者とスタッフの「顔が見える」関係性、子連れで気兼ねなく利用できる雰囲気や子育て支援企画など。2013年から、サロン経営志望者によるワンダー店主と、レンタルボックス（雑貨などの委託販売）がスタートし、地域の活動拠点、憩いの場となっている。

- ・物づくり工房：40名が「100歳まで働ける職場」を目指し活動。高齢者や子連れで働くママの雇用を実現。
- ・共同オフィス：NPO等の支援に長けている事業者が入居。カフェ等を利用する人たちの相談役になったり、イベント等のコラボレーションも生まれている。
- ・レンタルサロン：美容や健康にかかわる資格や技術を活かした開業を目指す女性たちが、経験を積んでいる。

(2)チャレンジ性 小峰さんの「地域の居場所づくりにチャレンジする」という覚悟。また、空家利用、商売に不向きな住宅街での事業展開というチャレンジは、成功すれば他地域へのノウハウ移転を可能にする。

(3)波及効果

カフェ：子育て中のママや早期退職した元企業戦士が厨房に入ってフライパンをふったり、障がい者施設で作るお菓子を販売したり、地元農家の野菜を紹介したりと、カフェを拠点とした地域ネットワークが広がっている。

工房：高齢者の働き場所を創出する他、子連れで働くママや子供たちとの多世代交流が生まれている。短時間労働やワークシェアリング等も実現。

(4)協働 行政の街づくりや人材育成に関する委託事業を受託したり、行政と共催で講座を実施。また、行政の視察やインターンシップを受け入れたり、大学への研究協力も行う。

(5)継続性 ビジネスの視点を取り入れた「コミュニティビジネス」の手法で収入が得られる仕組み作りを励む。



子育てグッズ工房の面々

[No. 111] 子どもを核とした「だがしや楽校@善行」での地域活性化

磯崎 恵美子（神奈川県 藤沢市 土木部 下水道業務課）

だがしや楽校というツールを用いて、地域住民や地域団体を巻き込みながら地域コミュニケーションの活性化を図ることを目的に取り組んでいます。

第1回目～4回目は公民館職員であったため、業務として行っていました。本来業務の枠を飛び越えて地域住民と交流し、信頼を得ながらの活動をしています。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ



DSC_3610

当初は公民館職員として、子どもが集まる事業を行いたいと思ったところから始まりました。たまたま「だがしや楽校」というものを知り、自費で本拠地にある山形や、その他の地域で開催されているだがしや楽校を見学、実践者への聞き取りなどを行い、ネットワークを広げていながら、平成20年度に第1回を開催しました。

その際、行政中心の運営ではなく、地域住民が中心となって行う方向性を作るため、地域の核になりそうな人物を一本釣りしてひっぱり、実行委員会を立ち上げて2回目以降の実施をしました。

最初は懐疑的だった実行委員も、子どもたちの喜ぶ姿を目の当たりにし、「子どもたちのためにやらないかん!」となって、今年で5回目を迎えます。

善行地区は旧住民の大変保守的な考えのある地域で、新しいものを受け入れにくい場所ではありましたが、地道なアプローチをしていくこと、自

分は黒子に徹することで「いつのまにかやっていた」「だがしや楽校じゃなくだましや楽校だ」などと冗談も出るほど、スタッフと一緒に楽しく取り組んでいます。

アピールポイント

(1) 地域住民から成る「だがしや楽校@善行」という組織での自主運営までに至った。また、地域の団体からの協賛や支援をもらって、地域全体と取り組みとなり、地域行事として定着した。

(2) 既存の地域行事には全くなかった手法、子どもの集まるイベントとしては藤沢市内でも珍しいイベントとなっている。

(3) 全国のだがしや楽校実践者との交流。

(4) 善行地域の自治会連合会をはじめとした地域団体や、子どもを対象に活動している団体との協同体制で運営している。

(5) 今年で5回目を迎え、3月のイベントだけではなく地域行事にも出店の声をかけられるようになってきている。今後も継続は間違いありません。



DSC_3702



DSC_3726



[No.112] SHIP (シップ) (信州イノベーションプロジェクト)

倉根 明德 (長野県 建設部 都市計画課)

学生から社会人まで、誰でもメンバーになれる SHIP というチームを立ち上げ、県内各地のお祭や地域づくり活動のサポートをしたり、様々な人が気軽に意見交換できる「オープンカフェ」を主催したりしています！

まだ始めたばかりの活動ですが、県・市町村・企業の若手職員、学生、地域の方々等と交流しながら楽しく活動しています！また、活動内容を facebook 等で報告し、地域の思いを共感できる仲間を増殖中です！

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

SHIP を立ち上げるきっかけとなったのは、長野県出身の大学生と社会人が中心となって企画し、渋谷のヒカリエで開催したイベント「信州若者 1000 人会議」にサポーターとして参加したことでした。「ふるさと信州のために何かしたい！」という強い思いを持った学生たちのプレゼンに感動し「こんな若者や地域で活動している方々の思いを共感し、それを政策に結び付ける公務員が必要だ！」と闘志に火が着きました！

まずは、県内各地の地域活動のお手伝いからスタート！そして、平成 25 年 9 月には、“若者の意見を県政に活かそう！”をテーマに、商店街の店舗で学生、社会人、行政職員が自由に意見交換する「オープンカフェ」を主催！県内からは「あいつ暇なのか？」という声も…笑

しかし！地域からは大歓迎され、オープンカフェの参加者からも定期開催を希望する声が多く寄せられました！

そこで SHIP の発足を知事に提案！知事からは「大賛成！ぜひ進めて欲しい！」と快く了承していただきました！現在は、上記のような活動を facebook 等で報告しながら仲間を増やしているところです。



①サポート活動

アピールポイント

(1)成果・効果

ある地域のお祭では、若者の参画が少ないことが課題でしたが、SHIP を通じて、若手公務員や学生が参画することになり、活動の幅が広がりました。SHIP を通じて、地域と行政の良好な関係を築き、県民総出で信州の未来を考えていけるようになることが、この活動の成果だと期待しています！

(2)チャレンジ性

SHIP の活動には部署や官民といった壁がありません！多様なスキルや考えを持った人たちが一緒に活動することで新たな発想や政策が生まれる場だと考えています。それだけでなく県庁という組織、公務員という役割に新たな文化や風土を作っていくとする取組です！

(3)波及効果

活動を始めたばかりですが、自分でも驚くくらい多くの方から「一緒に何かやろう！」と声をかけてもらっています。また、これまで地域へ出ることを躊躇していた若手の県庁職員からも「一緒に活動したい！」と言ってもらえるようになりました。さらに、他県や市町村、民間企業の若手職員の会とも繋がりが生まれつつあり、今後の活動が楽しみです！



③SHIP について



②主催活動 (オープンカフェ)

(4)協働

SHIP は、学生、社会人、地域の方々、公務員が一緒になって「信州の将来や信州らしい地域づくりを考える」協働の場になっています。また、政策だけでなく、SHIP を通じて知り合った方々が新たな事業を生み出すことも期待しています！(企業とデザイナーが出会い、新たな商品が生まれる等)

(5)継続性

このような活動を継続させるためには「楽しさ」はもちろんのこと「地域と行政の信頼関係」を築くことが必要だと思います。そのため、活動から得たアイデアや経験を行政の組織内で共有する方法や政策への反映(非反映)結果の公表方法等についてもしっかり考え、活動が長期間継続できるようにしていきます。

[No. 113] 元気おばちゃん食堂プロジェクト！

入江 嘉則（広島県 神石郡 神石高原町 まちづくり推進課）

私はNPO法人地域再生プロジェクトの副代表である。設立時から主体的に活動している。

本プロジェクトは、道の駅で食堂を経営しており、地元の新鮮食材を使った安心・安全で懐かしい「郷土料理」をバイキング形式で提供している。調理しているのはもちろん地元のおばちゃん達だ。

①地元雇用の拡大 ②地元経済の創出 ③地元資源の活用を目的としている。

どんな田舎でも「やればできる」をPRしたい。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ



写真1

私は、まちづくり推進課に勤務している。行政が言う「公平・公正」の勘違いと「責任逃れの先送り」（言い過ぎか。）に不満を持つと共に、町のため住民のために何かができるかを考えている途中でいきなり飛び出してしまった。

当NPOは、過疎高齢化の進む神石高原町の現状を認識し、多様なニーズに迅速にしかも柔軟に取り組むことを目的に設立した。

設立準備中に東日本大震災が発生し、設立後は急遽、宮城県気仙沼市大島地区の被災者支援を行った。その活動と並行し地域経済の創出・雇用・元気再生などを目的に、道の駅の食堂業務を受託し「自然食レストラン 高原の風」の運営を始めた。私自身、高齢化が進むことで郷土料理や、昔ながらの味付けなどが失われることがもったいないと思っていた。

当地では昔から結いという習慣があり、共同で物事に取り組んできた。今回も、女性会や農業団体等に説明を行い、地域住民が総出演で協働することを前提としたプロジェクトが実現した。郷土料理とあって、地元の60～70台のおばちゃんを口説きまくってようやく開店に漕ぎ付いた。2012年度は、4千4百万円の売り上げと4万人のご来店を頂いている。

アピールポイント

このプロジェクトの自慢はなんと言っても「おばちゃんの元気再生」である。当初、「レストラン経営なんて無理。出来ん、出来ん」と何度も断られたが、「地域で行う婚礼や葬儀に作っていた料理なら、今でも作れるじゃろ!? それを出せばいいんよ」などと説得もしたが合意を得られず、最後は3年後のハワイ旅行計画（出任せ）を餌によりやく口説くことに成功した。

しかし、今では毎日100～200人を超えるお客様に「おいしいよ」「がんばって」と声をかけられると「そんな出来ん、出来ん」と言っていたおばちゃんたちが、今では儲けてハワイに行こうと笑っている。70を超える、しかも孫がいるおばちゃん達だ。常時雇用者数は6人（うち町内4名）だが、パートを含めると11名を雇用することになった。雇用機会の少ない町で、1事業所の雇用者数とすれば「モデル」と言っても過言ではない。従業員が自主的にメニューやイベントのアイデアを出し、常に変化・進化し続けることで継続性を保っている。さらに、店には年間4万人の来客があり、隣接する産直販売施設や町内各観光施設へのプルファクターの役割も果たしている。

行政とも連携しており、町内小学校の課外体験活動に店舗を提供したり、地元の自治振興会、農業法人などの団体と協働し、自社農場の運営や新しい特産品づくり（6次産業化）に取り組むなど、地域と密着した取り組みを行っている。これがまさしく「地域の元気再生！」である。

高度成長期から数十年間、行政サービスの名のもとに本来住民がやるべき仕事を行政は請け負ってきた。しかし、これからは今まで請け負ってきた仕事を住民にお返ししていく時代である。役割分担による「協働」の考え方である。

我がNPO法人は、その仕事の受け皿にもなるし、今後も高齢化の進む町の将来における望ましい「姿」を住民と共に創造していく役割をになっていきたい。



写真2

[No. 114] 業務等での専門性を活かした審議会などへの市民参加

三宅 康裕（岡山県 倉敷市 環境サイクル局 環境政策部 環境政策課）

私は、5年前に民間企業から転職し、現在、所属する中核市では、環境行政に従事している。民間時代も総合コンサルタントで主に環境計画や環境アセスメントを担当していた。

3年前、出身地であり現在も居住する市において初の環境基本計画が策定されることとなった。諮問機関となる環境政策審議会の立ち上げにあたり、公募のあった市民委員へ応募し選任されたため、専門性を活かし、答申案の策定に参画した。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

元々は、民間指向が強く、卒業後も、地元総合コンサルタント2社で働いた。国の地方の出先や、東京の国所管の財団への出向も経験したが、基本的には環境行政と関連深い分野を担当してきた。皮肉なもので顧客は、全国各地の国の出先や地方自治体であり、徐々に行政の仕事に興味を持つとともに、自分と家族が暮らす出身地のことを気に掛けるようになっていった。

その後、縁あって、社会人経験者枠のあった今の職場に採用された。転職前も経験を地元で活かしたいと、ささやかな市民環境活動を行っていたが、転職後は、更に行政の経験も活かしたいと考えていた。

転職後2年目、本務で環境基本計画の見直しを行っていた矢先、地元でも環境基本計画が策定されることを知った。国や県などに比べ小さな市は、環境行政に明るい職員が少ない印象を持っている。初の環境計画を策定する市となればなおさらであり、ある程度コンサルなどに頼らざるを得ない。ただし、業者にもよるが、地域の特性を十分に踏まえない紋切り型の計画になりがちである。

そこで、専門性を持ち、地域と行政に明るい自分が参画すべきと考えた。結果、市の将来像など多くの部分で協力できたと思っている。

アピールポイント

（1）自らが暮らす地元自治体初となる環境基本計画が策定された。そして、計画に従った事業も徐々に進められている。

（2）業務で身に着けた専門性と市民活動で身に着けた幅広い知識が活かせるよう、市民委員に応募し論文審査を経て選任された。

（3）環境基本計画自体は、市の事業活動や市民活動の環境面での指針とも言えるものであり、市の施策全体に活かされている。また、私の場合は、たまたま専門が環境のため、環境審議会への応募であったが、教育や福祉や防災など他の分野においても審議会や協議会に諮られるケースは多く、住まいと職場の自治体が異なる公務員の場合、暮らしている自治体においては、自己の専門性にあった分野への参画が可能ではないだろうか。

（4）環境分野は廃棄物から地球温暖化、生物多様性や景観まで多岐にわたっており、当該審議会でも多様な分野から複数の市民や市民団体が参画し、それぞれの主体の協働したことにより本計画が作られたと考える。

また、個人的には、現在、この審議会などを通じて親しくなった森づくり系の環境NPOに所属することとなった。このNPOでは、市有林を企業と協働で整備したり自然体験の場として活用するなど、市が進める自然環境保全を自治体、企業との協働により進めている。そして、私は、本年度よりこのNPOの理事を拝命し、地域の自然環境を学びの場として活用するフィールドミュージアム事業などの企画運営に携わっており、この事業は、県の市民協働事業の採択を受けている。

（5）環境基本計画自体は、平成33年までの計画であり、その間関連する事業は継続される予定である。



写真①

[No. 115] ワールド・カフェ『たかさき福ミーティング』で繋がりをづくり

荒木 征二（群馬県 高崎市 都市整備部 スマートインター整備室）

高崎にはあらゆる分野のプロフェッショナルが揃っていて、それぞれが各々のステージで魅力的な活動をしています。その市民力をもっと有機的に、Web状に複雑に絡まり合わせることができれば、その力はさらに重厚で柔軟になるはずです。そこで私たちは、人々が意図しない人と意図せず出会い、意図しない対話を生む場を提供し、新たなアイデアや“気づき”を得てもらいたいと、『たかさき福ミーティング』を開催しています。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

スタートは“朝活”です。市の職員、特に若い職員は地域としっかり向き合うクセを身に付けておく必要があると考え、職員の中からコアメンバーを募り、そこにゲストをお招きすることから始めました。幸い、ゲストも次々と朝活メンバーとなってきて、月2回、これまでに20回開催してきました。現在は、会の名称を「タカサカツ！」としまして、毎回20人前後の参加者があり、すでに民間の参加者数が市の職員の参加者数を上回るほどに成長しています。

この「タカサカツ！」の中から生まれた発想が、『市民がお互いにもっと広く知り合い、繋がりが合うことができれば、この人と人との繋がりがこそ高崎の最強資源になるのではないか！』、というものでした。そこから、人々の出会いの場づくりを模索し始めました。

手法としては“出会い”と“決めない会議”を重視して、ワールド・カフェ形式としました。根っこの部分では街にこだわりたいので、会場は街中カフェにセットし、隔月で一年間はやり通そうと考えました。これまでに、定例3回とスピンオフ企画を1回開催して好評をいただいています。まだまだ参加者集めに苦労はしますが、次の開催準備も順調に進んでいます。



FukuMTG_01

アピールポイント

(1)成果・効果

これまでに100人以上の出会いと、その出会いから繰広げられる対話をプロデュースすることができ、有難いことに参加者からは大変な好評を頂いています。たったの100人かもしれませんが、これほどの人が互いに知り合い、そして理解し合っていることがとても良い効果を生んでいて、高崎全体の課題解決能力がぐっと向上しています。そもそも参加意欲が高い人が多いのですが、さらにその意欲に弾みがついているように感じます。

(2)チャレンジ性

合コンを企画できる職員は数あれど、異業種交流会を超越した真の出会いと気づきの場を、自らが労苦して企画・運営している。朝活の中から生まれた発想（というか、妄想に近かった）を現実に変現化できたのは、仲間達のチャレンジ精神があったからこそです。

(3)波及効果

各種研修やレセプションなどに呼ばれる事が多くなりました。ワールド・カフェをはじめとする、いわゆる“決めない会議”と呼ばれる話し合い手法は、問題解決のための機能的な会議手法に比べると、これまではあまり馴染のない手法でした。しかし、この『たかさき福ミーティング』の効果か、高崎ではこういった手法の話し合いが持たれることが多くなっています。

(4)協働

高崎経済大学の学生運営NPO法人DNAとは、第1回開催からコラボしています。現在、公式HPを立ち上げるべく企画中のところですが、こういった場面でもWebデザイナーを始めとする多くの方との協働が生まれています。

(5)継続性

高崎市民37万5千人のうち、千人に1人は地域づくり大好き人間がいるとしたら、当面の目標は375人の出会いをプロデュースすることです。そしてその後は輸出ステージです。県内だけでなく近隣各県を視野に入れ、ご当地福ミーティングを各地で手掛けるのが野望です。マンパワーの心配は無用です。なにしろこの運営スキルは無限にクローン可能ですから。



FukuMTG_02



FukuMTG_03

[No. 116] 地域で生まれた歌の普及・継承活動

國徳 健二（熊本県 玉名地域振興局 総務振興課）

- 私（國徳）の勤務先の管内2市4町で生まれた歌の普及・継承を行っている（現在30曲程度のストックあり）。具体的には、歌集を作成し、地元で行われる各種会合や懇親会などで参加者に紹介し一緒に歌ったりしている。
- また、集めた歌の1つについては、その保存会が中心メンバーの急逝により3年間活動が中断していたが、9月末に復活させ、地域のイベント等に出演している。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

●平成6年、上記に記載した保存会に出会い、以来その歌の大ファンとなった私は、業務上の集まり（懇親会）などでその歌を紹介し参加者と一緒に歌うなど、九州各県の県職員に普及させてきたところである。参考までにその歌は、有明海の保護、漁業の発展などを訴えている。

●昨年4月、その歌が生まれた市に所在する現勤務先へ赴任することとなり、こういうすばらしい歌が各市町に必ず存在すると確信し、仕事の合間を縫って集めているところである。さらに昨年9月、普及活動のソールとして、当時集めた13曲を収録した歌集を作成し、各種会合などで普及している（今年10月中には、さらに20曲程度を収録した第2集を作成予定）。

●特に前掲の保存会はこれまで各地のイベント等で活躍していたが、中心メンバーの急逝により3年間活動が中断していたことから、その歌の20年来の大ファンである私が当時のメンバーと交渉した結果、今年9月末に復活させることに成功した（すでに地元イベントに2回出演済み）。今後は、管内の市町だけでなく、業務上観光連携で協力関係にある島原半島の行事へ参加するなど、有明海沿岸の自治体への普及活動を行う予定。



IMG_1900

アピールポイント

(1)成果・効果

・集めた歌に共通していることは、その市や町の良さが凝縮しているということであり、これらの歌を普及・継承していくことは、その市町にとってその良さやポイントを確認することになることから、今後、地域の活性化を後押しするという点で貢献できる。

(2)チャレンジ性

・もともと以前から、私自身が気に入った歌を「くにけん（私の名前の略称）が選んだ名曲集」として編集したり、各地の歌の大会に出場してきた等の経験から、今回地域の歌にこだわりこれまで活動を行ってきたものである。

(3)波及効果

・ある歌の歌詞に「西に雲仙 東に別府 夢もでっかい観光路」とあり、私の担当業務が観光や地域づくりであることから、今後、島原半島との広域連携などを行ううえでのヒントを得るなど、仕事面でも役に立っている。

(4)協働

・これまでの活動を通じて、民間団体から各種イベントへの出演要請が増えてきており、それらの団体からは普及上のさまざまな支援をいただくなど、民間との協働も深まりつつある。

(5)継続性

・私は県職員であることから転勤が付き物だが、転勤してもこれまでの活動は継続していく意欲を強く持っている。他の県職員からの応援はあまり期待できない（奇人・変人扱いされているため）が、民間からの応援は十分見込めることから、今後の継続は可能である。



IMG_1905

[No. 117] 地域での水辺の生物多様性保全並びに方言・諺の記録化等活動

桜井 好基 (三重県 四日市 地域防災総合事務所)

地域の 3 要素である自然、文化、人に関する三重県亀山・鈴鹿地域を中心とした取組で、多様な団体等と協働し成果を形として残しつつ子供達の育成と併せ、地域を後世に伝えていくための次の 2 団体等での活動です。
 鈴鹿川のうお座：水辺の生物多様性保全に向けたため池のブラックバス等外来魚駆除、魚道整備等の環境改善の取組
 鈴国方言研：地域文化保存に向け、集落単位で消失間際の方言・諺等を記録する取組

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

H10 年の小学校 PTA 会長就任が地域活動に関わる機会となり、また当時の県の生活創造圏づくり活動に触発され、小川の消失等身近な水辺環境の変化に関心を持ち活動を始め、地域の仲間と、2 年後に鈴鹿川のうお座を、また方言調査の多方面展開に向け鈴国方言研を設立し、両団体の活動を主導

●鈴鹿川のうお座(水辺の生物多様性保全活動：10 名)

H12 会設立 ～ 河川堰堤に魚道整備促進 (計 5 魚道実現)

～ 川魚等の方言集作成 (流域文化の記録化)

鈴鹿川編(H17 A4 260 頁 35 種 150 集落)、中ノ川編(H16)

H15～ ため池の外来魚駆除 (計 22 池) ・駆除池を活用した希少種保全

H23 中部の未来創造大賞 (中経連賞) ・亀山市と協働事業協定

H24 環境大臣表彰 (地域環境功労)

●鈴国方言研 (生物等の方言・諺等の聴取・記録化活動：5 名)

H17 会設立 H20 動物編作成 (A4 150 頁 35 種約 90 集落)

H22 昆虫編 I 〃 (〃) H23 天候・諺編 〃 (〃)

H24 亀山市と協働事業協定、国立国語研究所の全国方言調査協力

※日本方言研究会で研究成果発表 2 回



方言研等の 5 冊の方言集

アピールポイント

自治会・水利組合等と協働したため池等の環境改善、方言集作成等成果を形として残しつつ子供達の地域 (環境) 学習と併せ、地域を後世に伝えていく地域に根ざした活動で、⑤継続性と成果の観点から団体化 (仲間+自主財源確保) した取組です。

●鈴鹿川のうお座は、近年悪化した水辺環境の改善のため、過去を知り (川文化記録化)、今を知り (現況調査)、未来を創る (具体的な環境改善)、3 段階の取組を積重ね中部の未来創造大賞、環境大臣表彰等を受賞

①成果・効果

・ため池のブラックバス等外来魚の完全駆除：400 名参加の高塚池等 22 池 (進捗 31%)。駆除池を活用し希少種保全

・河川堰堤に計 5 魚道実現 ・川魚等の方言集 (鈴鹿川編 (A4 260 頁) 等) 作成 ・子供達の環境学習

②③挑戦・波及：池干し外来魚駆除は、実績件数最多で全国の取組をリード・触発 (全国 TV 放映 2 回)

④協働：自治会等、三重大・名大・同種団体 (駆除池を活用した希少種保全、環境学習等)、亀山市 (協働事業協定)、県・国交省 (助言・相互協力)

●鈴国方言研は、消失間際の方言・諺等を記録化するもので、集落間で違いが大きい生き物等の古称等を域内全集落 (約 90) の古老から聴取

①成果・効果

・作成済方言集：動物編 (A4 150 頁)、昆虫編 I (〃)、天候・諺編 (〃)

※作成予定：H26→鳥編、昆虫編 II、H28～昆虫編 III、昔の遊び編等

・日本方言研究会で発表 2 回 ・学校での地域学習活用

②挑戦：地道な聴取の積重ねで方言情報蓄積地日本一へ！

③波及：学会・HP で調査必要性訴え

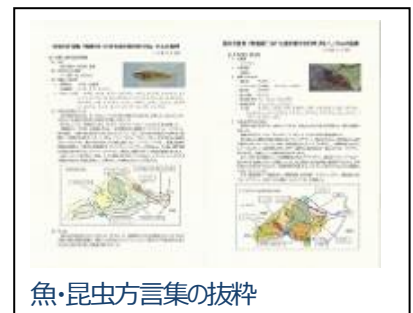
④協働：亀山市 (協働事業協定)、国立国語研究所・滋賀大 (助言・全国方言調査協力)、県・野鳥の会等

●その他 在住外国人支援。亀山市市民協働センター設立委員長(H18)等

！地域での活動は、動くほど地域を良くし、地域愛を育みます！



うお座活動写真



魚・昆虫方言集の抜粋

田口 良実（秋田県 秋田地域振興局 農林部 農業振興普及課）

- ①「秋田にホスピスを増やす会」代表 秋田市のみのホスピスを県南、県北にも各1設置しようという活動。県のがん対策委員として上記を計画に明記。来春、県南に1カ所設置予定
- ②「昔の秋田をみて元気になっていただく会」事務局長 寝たきり、車いす等の高齢者に昔の秋田の写真をスライドで見せ、元気づける活動
- ③「うつコミュニティー秋田」スタッフ 自分のうつ経験を、現在のうつ患者の支援に役立てる相談支援活動

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

①平成13年に妻ががん死（享年35歳）。その後、年一度の遺族会では皆「ホスピスで最後を迎えられて本当に良かった」と口々に言う。ところがホスピス認知が進むにつれ、病院側が13しかない病室に入院させる患者の優先順位付けに苦悩する現状を知り、本会を設立。他の遺族はほとんど高齢者であり、自分が決意。県のがん対策推進計画策定委員として様々な提案を計画に盛り込ませた。全国がん政策サミットへの参加で、他県の患者会との情報交換や他県の好事例を秋田に伝えることが出来た。H19の全国がん患者大集会では東北地区実行委員長を務めた。

②叔父が病院で寝たきりの時、昔の秋田市の写真集を見せても、ベッドに縛られ見られなかった。スライドにして壁などに映せば見られると思い、叔父の死後、高齢者施設、病院等を回って見せる活動を始めた。（会長は別人）

③震災地支援活動を行うNPOへの県庁上司のむげな対応を契機に自分がうつになり半年間休職。その時この会に参加して少し元気になる。自分のうつ経験を活かそうとこの支援活動に参加した。県庁内のHPにも本会の開催予定を掲示し、県職員のうつ予備軍の支援活動も行っている。



がん政策サミット 説明風景

アピールポイント

①(1)県議会議員に働きかけ、がん対策推進議員連盟を発足させ、その発議で、全国で11番目、東北では初めてのがん対策推進条例を制定させた。全国がん政策サミットに毎年参加し、がん対策のあるべき姿、がん患者の要望取りまとめの手法、他県の好事例、国、政治家等への働きかけの仕方など学んだ。また他県のがん患者会との情報交換にもつながった。(2)県内で初めてホスピスを増やす目的のがん患者会を発足。(3)他県の好事例の本県への伝達、他県がん患者会への助言、応援等。具体的には青森県のがん関係シンポジウムで、対策、活動の遅れている青森県の行政、がん患者等に対し、隣県同士手を取り合い共にがん対策活動を進めようとエールを送った。(4)県庁のがん対策推進チーム(室)と、患者側からの要望、他県がん対策の情報提供等で協働した。(5)当会など5団体が参加した「秋田県がん患者団体連絡協議会」は今でも秋田のがん患者会の中心となって活動を継続している。

②(1)毎月1～2回、高齢者施設、病院等を訪問して活動を行っている。

(2)秋田県、いや全国でも初めて(?)の活動

③(1)初めて精神的な病を経験する人の駆け込み寺、やすらぎの場の提供(5)過去5カ年ほど、月1回定期的に開催。(その他)

・様々な経験(父の自殺、妻のがん死、母の自宅介護、PTA活動、子育て、うつ体験等)をしたことから、がん関係のみにとらわれず、様々な活動に参画。・ただし、うつ再発の心配もあり、ストレスの多い「主催者」にはならず、他者が企画した前向きなイベント拍手や質問をして盛り上げる役割に徹している。・別のNPO代表のストレス解消に朝のテニスに付き合い、コートや人数の確保を担って支援している。・県職員である、県庁内部にいるという利点を活かし、「県庁内何でも相談人」的な活動、つまり仕事の分野以外の相談、仲介活動などを行っている。



がん政策の要望書を議員に手渡し



「昔の秋田を」の会代表の説明風景



[No. 119] 鶏ちゃん合衆国～岐阜県の郷土料理「鶏（けい）ちゃん」振興活動

都竹 淳也（岐阜県 健康福祉部 地域医療推進課）

岐阜県の郷土料理「鶏（けい）ちゃん」を盛り上げ、普及・振興を図ることを目的に、有志市民と「鶏ちゃん合衆国」を設立し、鶏ちゃんの食べ比べ交流会、鶏ちゃんツアー、鶏ちゃんガイドブックの制作や食べ歩きスタンプラリー、イベントへの出店等を行っています。ユーモアに富んだ活動を旨とし、国旗や国歌、国章、憲法なども制作。さらに「羽一鶏（はーぼーど）大学」と称し、親子鶏ちゃん講座などの教育活動も行っています。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ



親子鶏ちゃん教室

鶏ちゃんは岐阜県下呂市、郡上市周辺の郷土料理ですが、その食文化のない地域に育ち、就職してからこの料理を知った私は、何とか知名度を高められないかと考えてきました。しかし、鶏ちゃんは地域によって味がバラバラで、発祥を名乗る地域も複数あり、まとまったPR活動は難しいとされてきました。私は異なるものを無理に一つにするのではなく、緩やかにつなぐ組織をつくればままと考え、高度な自治権を持つ州の連合体であるアメリカ合衆国をイメージし、「鶏ちゃん合衆国」のコンセプトを発想しました。この活動は県の仕事ではなく、民間のまちづくり活動でなくてはならないと考えていた折、24年1月にご縁で意欲ある2名の賛同者と知り合い、合衆国の設立を始動。仲間の輪が広がり、約半年で「建国」にこぎつけました。鶏ちゃんを提供する飲食店を「州」、小売専門店を「自治区」とし、その数は約80に及んでいます。また、鶏ちゃんを愛する方々＝「国民」の数

も約700名になっております。合衆国は会費で運営する自主的なまちづくり団体であり、私は、事務局長にあたる「国務長官」として、合衆国の企画・運営等全般を担当しています。

アピールポイント

（1）成果・効果 イベント等で「鶏ちゃん合衆国だ」と口にする人を多く見かけられるようになるなど、知名度が上がっている実感があります。これに伴い、メディアで鶏ちゃんを取り上げられる頻度は確実に増加しており、加盟の飲食店やメーカーからも「お客さんが増えた」「売り上げが増えた」との声が聞かれるようになってきました。

（2）チャレンジ性 イベント出店中心の展開とは一線を画し、各地で味の違う鶏ちゃんの食べ比べを行う交流会を行い、鍋をつつきながら交流を深めるという「人と人をつなぐ活動」であることを重視しています。そのほか、国旗や国歌、パスポート、議会、羽一鶏大学など遊び心に富んだ活動で話題性をつくることで、食を通じたまちづくり活動のあり方に一石を投じたと思っています。

（3）波及性 長野県の鶏肉郷土料理の「山賊焼」と「鶏和条約」を締結し、連携交流を進めることが決まったほか、他県からの視察も入るようになり、合衆国の活動のコンセプトが他地域に広がりつつあります。県内では、県立高校の観光学科が取り組んだ観光プランづくりや、児童への鶏ちゃん食べ比べ講座を通じて、食育などにも波及しています。また、市町村域を超えた食のまちづくり活動の実践例として、行政関係者にも評価をいただいています。

（4）協働性 鶏ちゃん合衆国の役員は18名おりますが、約半数は、私のような公務員、建築士、デザイナー、広告代理店、印刷業、ライターなど鶏ちゃんのビジネスに直接関係のない有志です。例えば、印刷物やPRグッズのデザインはデザイナーが行うなど、自らの強みを生かした活動を行っています。

（5）継続性 合衆国は構成員である飲食店やメーカー等の会費により運営されていますが、その金額は年間5千円～1万円で負担感のない水準としており、PRグッズは実費頒布するなど、運営を行政や補助金に依存しないことで持続可能な体質にしています。



建国1周年



建国記念式典

毛利 広行（三重県 三重郡 菰野町 議会事務局）

町民及び町内企業と連携した活動 町内の各種イベントへの出展・ボランティア、婚活事業、町民と協働での各種セミナーなどの企画、運営を実施しています。

会員間の連携を図る活動 マラソンや自転車など各自の趣味などの共有を図ることを目的とした練習や各種大会への参加、さらに、応援ツアーなどを企画し、職員をはじめとするより多くの会員が親睦できる機会づくりに努めています。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

この法人の立ち上げには、大きく2つ利点を見込んでいます。一つは、職員が行政という立場でない形で地域活動に参加し、活動を通じ、多くの住民と交流を図り、自らのスキルアップにつなげること、もう一つは、職員間の関係が希薄化する事の無いよう、さらに、他の担当職員の行う業務などにおいて協力できる環境を整え、組織として個人の負担や悩みを軽減することです。

町役場庁舎の環境整備を目的とする花の会、野球や自転車など各種スポーツ団体など、職員間で構成する団体が集まり、菰野町役場として各団体の向上を目指し、立ち上げとなりました。

夏祭り、マラソン大会など町役場も関係するイベントへのボランティアや出展をはじめ、町内企業と連携をした2度の婚活事業、子育てセミナーや被災地支援に行った職員の報告会、地域住民の方とともに当町のこれからを考える活性化サミットなどの企画や運営を行い、自らの行政マンとして知識経験を地域住民の皆さんとともに進める舞台において活かすとともに、住民の方から職場では学ぶことのできない多くのことを頂戴しています。また、それぞれの活動に対しても、法人として積極的な協力・応援を実施しています。

アピールポイント

(1)成果・効果 マラソン大会や文化祭などの町内の各イベントを積極的にサポートしています。中には、事務局を町役場が担当するものもありますが、NPO法人の職員が他の出展者やボランティアと同じ立場で参加すること、異なる目線で町行政の運営を観察することが可能となり、職員のスキルアップにも繋がっています。

(2)チャレンジ性 町内企業と連携した婚活や被災地女川町の秋刀魚店頭販売支援など、行政という立場では行いにくいことに取り組んでいます。今後も、NPO法人の技量に合わせて、これまでの町行政ではできなかったことにチャレンジしたいと考えています。

(3)波及効果 法人認証から1年余りの団体ですので、町内においても、少しずつではありますが、周知を進めているところです。われわれの活動に地域のNPO団体が刺激を受け、各種事業の活性化が図られています。また、町長自身がNPO法人の会員であり、積極的な活動参加や声かけにより、町役場としての情報共有や意欲の向上などの効果が生まれています。

(4)協働 町内の各イベントについては、それぞれの実行委員会や町内企業などとともに、職員研修も兼ねた菰野町地域活性化サミットについては、地域貢献活動団体及び町担当者とともに、新たな事業の開発に努め、それぞれの成功に向けて尽力しています。

(5)継続性 NPO法人が行う各イベントで得た収益などを新たな事業の財源として充当することで、活動に対する個々の負担を軽減することで、継続かつ拡大のある組織を目指しています。また、NPO法人の構成母体は、野球やテニス、マラソンなど各職員間で構成されたサークル活動の団体を中心にあり、町長をはじめとして、サークル活動の拡大にも努め、それぞれの活動について応援や支援でより深い親睦を図るなど、会員とNPO活動との間に相互扶助の関係が保たれるように心がけています。



2013.2.2



2013.7.3



2013.10.17

[No. 121] カステラ販売を通じた、高岡の魅力づくり活動

関本 尚彦（富山県 高岡市 総務部 納税課）

三大佛の一つである高岡大佛は、過去に消失し、市民の強い思いにより再建された三代目です。また、地場産業である高岡銅器の技術を用い、かんざしや鏡を含む市民からの浄財寄付により完成した大佛は、まさに市民のアイデンティティであり、地域の宝と言えます。こうした建立時のエピソードを発信し、魅力あるまちづくりを目指すため、銅器の焼き型、地産素材、技術を活用しながら、大佛を型取ったカステラを販売しています。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

高岡のまちを楽しみたい、何かワクワクするようなことをしたいという思いから今の活動母体（NPO法人大佛三郎）の前身となる、まちづくりグループ『らくだらんま』を平成19年に結成いたしました。同団体では、市内外から多くの人を訪れる『たかおか朝市』において、地元精肉屋の高岡コロッセを販売したり、子どもたちにマチナカの生活を体験してもらう『まちなかホームステイ』、クイズを解きながら商店街のスイーツ店舗を巡る『おかしの森』などを実施してまいりました。

その後、より地域に深く入り込み責任ある活動を展開したいという思いから、有志メンバーとともにNPO法人大佛三郎を平成24年7月に設立いたしました。このNPO法人では、まちのシンボルである高岡大仏周辺に人のつながりが生まれ元気があふれるコミュニティパワースポットを創出するため、多種多様な主体と力を

合わせ、魅力的商業空間創出事業、地域コミュニティ育成事業、愛着・誇りの醸成事業等を行っています。組織運営や事業において日々試行錯誤の連続ですが、他のメンバーや地域の皆さんと力を合わせて高岡のまちづくりに取り組んでいます。

アピールポイント

(1)成果・効果

- ・カステラ販売が引き金となり、地域住民や商店、行政機関等において高岡大仏を地域資源として見直す動きが加速しています。
- ・実際にこの1年で、若手グラフィックデザイナーによる新感覚ポスターの製作や普段上げられない台座を巡る地獄遊楽ツアー、また大仏のライトアップやスナップフォトコンテストなど様々な事業が展開されています。
- ・さらに、大仏カステラの販売を通じ、観光客の満足度向上（おみやげ需要）にも貢献しています。

(2)チャレンジ性

- ・カステラ販売のほか、大仏前公園をより魅力的に人が集う場所とするため、大仏関連商品や市内スイーツの販売ブースを集めた高岡大仏あおぞらマーケットを開催しました。
- ・また、パラソルベンチを用い、大仏公園内に参拝者の休憩スペースを設置する試みを展開し、地元住民、観光客から好評を頂きました。

(3)波及効果

- ・地域の魅力、資源を親しみやすい食で発信する動きが広まっており、本市福岡町などでも、同様の銅器メーカー製造の焼き型を用いたつくりもん焼きが大人気です。
- ・また、自身の公務（納税課）に対する波及効果はわずかですが、活動を通じて得られた人脈や情報は、観光や商業、市民協働の担当課において積極的に活用頂いています。

(4)協働

- ・カステラの焼き型は、大佛三郎の理念に共感いただいた高岡銅器メーカーに製造いただきました。
- ・卵などの素材も地元産にこだわり、カステラ生地製造は、地元お菓子屋さんをお願いしています。

(5)継続性

- ・コミュニティビジネスの視点を取り入れ適正な収益確保を目指し、補助金に頼らない組織運営を実現しています。
- ・スタッフの育成やノウハウ共有に努めた結果、月2回のたかおか朝市やなべ祭など、各種イベントで幅広く活動を展開することが出来るようになってきました。



焼き風景



大仏あおぞらマーケット



大佛三郎カステラ

[No. 124] ジオパークの海の魅力を伝える活動

中谷 英明（鳥取県 生活環境部 緑豊かな自然課 山陰海岸世界ジオパーク推進室）

地元の海の魅力を伝えるための撮影活動を続けており、県内外での写真展の開催、講演会、ウェブなどで地域の魅力を発信中である。近年は著名人と共著による出版や、撮影した動画が全国的な話題となるなど、地域の観光誘客に大きく貢献した。

また、撮影活動を通じ地域での人的ネットワークも幅広く、団体と連携したメディア対策や講座の開催、イベントでのステージ活動など公務員の枠を越えた様々な活動が高く評価されている。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ



表紙イメージ

小学生の頃から鳥取県岩美町の海の魅力にとりつかれ、水中写真撮影を開始。大学では魚類学を学び、水産技術職員として県庁に入庁。周年を通じて海に通い続け、年間の水中撮影時間は100時間を超える。撮影した写真は神秘的な海中景観や生きものなどで、平成21年から自身のブログ等で連日紹介。映像はメディア、自治体等から高く評価され、CMや全国誌、観光パンフレットなどで多数採用されている。近年は撮影、編集した透明カヌーの動画がヤフーのトップページに紹介され全国的な話題となった。

また、写真展も精力的に開催しており、県内だけでなく鳥取県立図書館と連携し県外でも展示活動を行っている。

平成22年には山陰海岸初の水中写真集「Tottori Blue」を出版。これがきっかけとなり、東京海洋大学客員准教授でイラストレーターの「さかなクン」と共著で「さかなクンの山陰海岸ギョギョ図鑑」を平成23年に出版した。出版以降、学園祭や地元での講演依頼等も多数受け入れ、自身も「かにクン」としてステージ活動なども展開。

これらの活動は平成25年の鳥取県議会答弁で県知事が「型破りな名物職員」の例示で名指しで紹介した。

アピールポイント

撮影活動を通じて、同じ海でアクティビティを提供している地元のような団体（カヌー、ダイビング、サーフィン、遊覧船）や漁業者、観光事業者、メディア関係者などと幅広い人的ネットワークがあり、ダイビング事業の起業協力やスノーケリング体験講座の開催、観光魅力をアピールするためのメディア対策などに取り組んでいる。平成25年はカヌーガイド団体と連携して新規導入の「クリアカヌー」をPRする動画を作成したところ、透明度の高い海がヤフーで紹介され話題を呼び、動画アクセスは12万を超え、連日のメディア取材を受けるに至った。取材に際しては得意とする海中映像を動画、静止画問わずメディアに無償で提供し、その宣伝効果は1千万円をゆうに超えると評されている。この結果、平成25年のカヌー体験者数は前年比145%を記録、地元の海水浴場の利用者数も前年比35%増を記録した。このほか、砂丘の観光関係者と連携し全国規模の注目を集めた「砂丘糸電話実験イベント」や、スノーケリング体験団体と共催しての写真撮影講座の開催、日本さかな検定「ととけん」の鳥取県誘致など、その活動は多岐にわたる。

さかなクンと親交があり、平成24年9月には鳥取県立博物館附属山陰海岸学習館のアドバイザー「ギョギョバイザー」の就任を実現させ、鳥取県が関係するさかなクンのステージでは、「かにクン」として共演し、芸人並の軽妙なトークを展開する。最近の学校や商工会での講演会や観光イベントではかにクンスタイルでの登場が定着しつつあり、明るく親しみのあるキャラクターは参加者から好評を得ている。

職員が担当している「ジオパーク地域の活性化」の業務では、ジオパークの認知度向上が最大の課題とされており、職員の特技を活かし公私両面で様々な主体と交流しながら、ユニークな手法で鳥取県の魅力を発信し続けている活動が評価され、平成23年には知事表彰を受けた。



8DA_5490nx



8DA_9927

[No. 125] 成沢小おやじの会代表(創立・企画・活動・発展・継続・飛躍へ)

今野 幸樹 (茨城県 日立市 教育委員会 郷土博物館)

「すべては子ども達のために」を基本に、

- ・子ども達にもっと楽しい体験と思い出を！
- ・子ども達にもっと安心と安全を！
- ・子ども達に夢と希望を！
- ・おやじ達が交流を図りおやじパワーで学校と地域に活力を！

を掲げ、活動を推進するために、小学校PTAの組織にも加入し、教員・保護者・地域の方々からの多くの支援・協力・声援を受け活動。年10以上の自主企画事業の他、学校行事・子ども会行事・地域行事もサポート

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

子ども達・保護者・学校・地域にとって、プラスになるであろうとの想いから「おやじの会を創ろう」と考え、平成18年、小学校児童全世帯に、「お父さん出番ですよ！」と呼びかけをし、26名のおやじが共感し活動を開始。初年度から、下記事業を企画し活動。

- ・地域パトロール (地域巡回実施)
- ・サイクリング (往復約40kmのサイクリング)
- ・水泳教室 (着衣水泳体験や、溺れた時の対処方法等)
- ・夜のプール (夜の学校プールで非日常を楽しむ)
- ・宿泊体験 (校庭に子ども達がダンボールハウスを創り宿泊。校舎内きもだめし・夜のプール等を実施)
- ・昼のピクニック (山でのピクニック。※池越エスターザン等設置)
- ・夜のピクニック (満月の日、月明かりの下を歩く)
- ・体育教室 (体育が苦手な児童の苦手克服)
- ・自転車教室 (自転車に乗れない児童を乗れるようにする)
- ・ボウリング大会 (児童100人超でのボウリング大会)
- ・We Love♥成沢 (地域内の清掃)
- ・卒業生へのメッセージ (ビデオで卒業生へエール)

現在48名(児童世帯数の1割超)で積極的な活動を展開中。



宿泊体験集合写真



サイクリング集合写真

アピールポイント

(1)設立時から「地域の子供も自分の子供と同じように、見守り・励まし・育てる！」(他人の子も怒る・褒める)を活動スタイルとしてきたことにより、「地域親」として地域にしっかり根付いてきている。以前は「母親」主体のPTA・子供会・地域活動や行事等へ参加が、おやじ達の積極的参画により、盛り上がりが見られ、地域の一体感も強化されている。(子供会加入率は97%以上で市内で突出)また、こども達の環境・性格・人間関係等も解っているのでトラブル・いじめ防止、非行防止等にも役立っている。児童が卒業しても「地域親」は継続で、高校生になっても交流はつづき、本人や保護者から悩みの相談等もある)

(2)やったほうが良いことはすぐにやる！(先伸ばし禁止) 好ましくない事は改善する！(見て見ぬふり禁止) できない理由があれば解決できるようにする！(言い訳禁止) 事後反省をしっかり行い次に活かす！(やりっ放し禁止) でチーム活動を推進。初年度から事業を展開し、毎年バージョンアップ魅力アップを図っている。

(3)他に類をみない活動であることから、報道でも取り上げられ、「組織の創り方」「組織の盛り上げ方」「事業実施手法」等の問合せ多数あり。また「事例発表」の依頼もあり発表を実施。

(4)各自の個性・長所・得意・不得意を理解、活躍の場・能力を発揮できるよう配慮し、誰もが主役になれる環境・チャンスを創っている。

(5)メンバーに「目標と目的」「楽しさと存在価値」を持ってもらうことで、継続可能な活動となっている。



夜のピクニック集合写真

[No. 126] 学校と地域の連携をテーマに地域に飛び出す公務員活動

中尾 雅幸（佐賀県 武雄市 つながる部 市民協働課・男女参画課・被災者支援課）

活動には3つの柱がある。①小学生の放課後の居場所づくりと活動支援を行う、よりみちステーション“ばちばちや”で代表の補佐。②武雄中学校と家庭地域の連携活動を行う“武中のちから”のコーディネーター（地域担当）。③中学生、高校生、大学生の夢実現のための情報の提供と個別アドバイスを実施。そして、この3つの活動を連動させ、小学生から大学生、そして地域の人材をつなぐ総合的育ちの環境づくりを実現している。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

農林水産省に15年勤務したが霞が関の空気が合わず、本当に飛び出し、まちづくりコンサルタントに転身。10年間、子ども、市民の意見を徹底的に取り入れた計画づくりや商店街を舞台にした小学生のキャリア教育を推進。市民とともに創る魅力あふれるまちづくりの経験を活かすため48歳で武雄市役所に中途採用されたものの配属先は競争事業所、そして、県庁国際戦略グループへの出向。

引き離されるほど思いは募り、地域課題解決を行うプチ起業塾へ参加。放課後の子どもの居場所づくりを行う“よりみちステーションばちばちや”の設立に参加し代表の秘書官を務める。また、地域との連携によるキャリア教育推進を行う武雄中学校に申し出て地域連携担当のコーディネーターに就任。本年度は長崎県の学校支援コーディネーター養成講座の講師を務める。また、高、大生の地域活動や将来の夢実現のため情報提供や組織・人材との橋渡しを行い、この取り組みはfacebookを通じ九州各地で実施。

以上の学校と家庭、地域の面的連携活動をコーディネートするとともに小学校から大学、そして、育ちを見守り応援する大人までの世代間のネットワークを構築。



ばちばちやで中学生ボランティアによる絵画教室



武雄中学校での絵本の読み聞かせ

アピールポイント

(1)成果・効果 小学生から大学生と地域の大人の橋渡しすることにより世代間交流が推進され、自己肯定感や郷土への愛着心を醸成し、郷土のためにアクションを起こす人材が育っている。また、コーディネーターとして目的を同じくする団体、個人をつなぎその連携を大きな力に変えることに成功した。

(2)チャレンジ性 facebookを活用した情報の共有と発信を行っている。活動の予告、経過、結果報告はもちろん、グループ機能を活用し、情報を共有し常に『行動ができる時のみの参加』することが可能となる。これにより地域に飛び出す公務員活動の課題である、多忙により参加できないという悩みが解決した。またリアルで情報交換した学生とは、チャット機能を通じて地域活動や就職活動の個別アドバイスを行っている。

(3)波及効果 学校と地域の連携活動については近隣の中学校への情報提供を行うほか、県の事例報告会を通じて県内の小中学校へ波及している。また長崎県の学校と地域の連携を担うコーディネーター養成講座の講師も行い、取り組みを他県にも広げている。またfacebookを活用し常に学校支援の活動状況を伝え、視察等の受け入れも行っている。

(4)協働 勤務部署が市民協働課であり常に情報を教育委員会事務局等の関係機関と共有し協働体制を構築している。また、佐賀県や財団の事業を積極的に導入することにより、資金面だけでなく、情報拡散や人的支援等をいただき協働体制を築いている。

(5)継続性 アドバイスにより就職が実現した社会人が活動に力加わり、中学生が小学生の居場所づくりに、大学生が中学生の学習支援に入るなど、世代間の交流・連携が広がりつつある。facebookの導入により参加の仕方の多様性が選択できることで多くの方の関わりが可能になったから実現できたことである。



武雄中学校で実施している赤ちゃんや中学生、地域の触れ合いの場づくり P1220287

[No. 127] 避難所体験 学校に泊まろう！（火を囲んで防災ワークショップ）

小川 俊明（埼玉県 川口市 企画財政部 総合政策課）

日頃から「地域教育」や「コミュニティ」を意識している。地元の小学校のPTA会長に就任したのを機に、考えに賛同してくれた子ども会役員、隣接する児童館職員と企画した。普段通っている学校は避難所となり、他者との関わりなしでは生活できない状況に子どもたちを置いて、人との共同の大切さを、相互扶助体験を通じて感じてもらう、通常の防災訓練とは一線を画す、主体的な体験の場を創った。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

通年事業をこなすのではなく、自らが描く企画を実現したい思いから、校長、学校の先生、地域の役員さんに事あるごとに話をしながら準備を進めた。運動会、お祭り、講演会などが地域と学校を繋ぐ行事として実施されているものの、どこか形骸化し、肝心の子供、先生、保護者、地域の方々が主体的に活動をする場としては、少し物足りなさを感じていた。震災から2年が経過し、被災地はまだ復興中という状況にありながら、私たちの日常は震災前の不自由のない生活に戻りつつある。

また、「子供達の体験の場を創る」という観点から言えば、すべてが準備され、お客さんとして参加するのではなく、自らも一緒に作り上げるという体験をしてもらいたいという思いを伝え、地域活動のキーマン数名と共に学校に働きかけ、ようやく実現することができた。災害時、学校は避難所となる。満足な食料もなく快適な環境ではないことを実際に体験してもらう企画の性質上、参加者の安全や学校の管理責任などを危惧する声も地域（町会）からあがったり、学校も難色を示していた。しかし、結果として教職員、参加者からは親子ともに貴重な体験ができたという声をたくさん頂くことができた。



DSCF6314



DSCF6346

アピールポイント

（1）成果・効果

活動のきっかけでも述べたとおり、十分な設備が無い学校という場所で、他者とともに一夜を過ごすことによって、他者を思いやる、気遣うことの大切さを感じてもらった。特に、一晚宿泊した子供たちが、翌朝に積極的に後片付けをしていた姿が印象的だった。

（2）チャレンジ性

学校に宿泊するという行為自体が、防犯面、管理責任などの面から難しく、これまで宿泊行事を行っていた学校もやめてしまったところもある。学校、PTA主催と銘をうって実施することのハードルが非常に高かった。そこで、区の防災担当課に防災訓練として位置付け、アルファ米などの非常食を参加者分用意してもらい、

「防災訓練の一環」というねらいを加えた。また、夏開催のため、参加者の暑さによる健康面なども懸念されたが、不自由な状況を体験するということで了承を得た。

（3）波及効果

企画段階の心配は大きかったゆえ、また、教職員が全面的に協力してくれたことも相まって、学校、参加者、地域との関係性が深まった。

（4）協働

実施したワークショップは、アイスブレイクにバースデー・ラインなどを導入し、グループで協力して段ボールを使った思い思いの家を創る、火を囲んでのキャンプファイヤー、屋外で非常食を食するなど、常に他者との関わりを念頭にコンテンツを用意した。

（5）継続性

実施後、校長先生がさっそく参加者、参加教員にアンケートを実施してくれた。できれば来年も続けて欲しいという声も多く、次年度以降の開催、ならびに近隣の学校でも実施して欲しいと思う。

全体の所感として、段ボールWSは、大人、先生、子供も夢中になって作品づくりをしている姿が印象的だった。



DSCF6365

[No. 128] 街さ行こう（街最高）中心市街地買い物ツアーの取組

今崎 泰浩（栃木県 宇都宮市 経済部 産業政策課）

中心市街地商店街の活性化、高齢者の外出・買い物支援及び地域内交通の潜在的利用者発掘に寄与することを目的に、60～70 代の本市周辺地区住民を対象とした、市内各地区から中心市街地への買い物ツアー「街さ行こう（街最高！）ツアー」を実施。

ホテルの無料送迎バスで、市内各地区から街なかに移動し、シティガイドの案内で、雛めぐりなど街なかを散策、ホテルで昼食、買い物等を行い、送迎バスにて各地区へ戻る。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

職員の自主研究グループ「MiyaBiz」の立ち上がりのきっかけは、2010 年の夏に行った市長と有志職員の座談会である。様々な部署から 10 人ほどの職員が集まり、座談会後に、「地域資源を生かした地域活性化策を検討し、実現に結びつけ、宇都宮を元気にしよう」との趣旨のもと、自主研究グループを作ることになった。

2011 年 3 月の東日本大震災に伴う電力需要の逼迫により、本市においても一層の節電対策が求められ、その 1 つとしてスーパークールビズを実施することとなった。これを機に、江戸時代中期から続く本市の伝統工芸である染物の「宮染め」を用いた、公務中にも着用が可能なシャツを製作した。

職人が手仕事で反物を一枚ずつ染め上げるため、量産ができない中、職員への受注販売を始め、市長をはじめとする職員等が率先して 400 着のシャツを購入した。ジュニア未来議会では市長、議長を始め出席した市議員等が全員着用したこともあり、市民から購入希望の問い合わせが寄せられたため、2012 年には、地元の百貨店に働きかけ、200 着を、今年は 190 着を一般販売した。

第二段の取組が今回の高齢者の外出・買い物支援事業である。

アピールポイント

「街さ」は、宇都宮の方言で、「街に」の意味である。「街に行こう」と「街が最高」をかけて、「街さ行こう」ツアーと命名し、買い物弱者の救済や高齢者の外出支援及び地域内交通の利用も組み込んだ複合的な（1 石 4 鳥の）中心市街地活性化策である。中心市街地と地域の往復に、ホテルでの昼食を組み込み、そのホテルの送迎バスを活用することで、運賃の無料化を実現した。また、ツアーの魅力向上のため、うつのみやシティガイド協会に協力を依頼し、ツアーでの引率・参加者への説明も協働で実施した（24 年 2 月実証実験 2 回実施、参加者合計 49 名）。

実証実験により、きっかけがあれば中心市街地に来たいと思っている高齢者が多いことが判明した。参加者が大量のおみやげを抱え、笑顔で帰路についたことは、本格実施への原動力となった。

この取組は本市独自のものであるため、テレビ、新聞など、各メディアに実証実験が取り上げられ、市民レベルでの問題意識の啓発につながった。アンケートの結果では、半数以上が「年 4 回開催」と回答しており、季節ごとの開催が望まれていることから、本格実施では参加機会を拡大し、通年開催することとした。

2012 年 10 月より「学生による空き店舗活用事業」により中心市街地に出店している「カンマス」をパートナーに本格実施（7 回開催、153 名参加）本格実施に際しては、老人会等に参加を呼びかけたところであるが、地区老人会が市内に 39 地区あり、さらに単位老人会にまで拡大すれば、かなりの参加団体が見込める。商店街の自らの魅力づくりの努力と併せ、ツアーが軌道にのった時には、毎日街なかにはツアー参加者が滞在することになり、賑わい創出の一助となる。2013 年度からは、うつのみやシティガイド協会が直接の事務局となり、安定した開催が見込まれる。また、送迎バスを提供するホテルも 2 社に拡大している。



シティガイドとともに街なかを散策する参加者たち



大量のお土産を抱えて笑顔で帰路に着く参加者たち

[No. 129] 二輪車の安全運転意識の普及・啓発活動

山田 浩昭（鳥取県 中部総合事務所 生活環境局 環境・循環推進課）

平成4年から現在まで、二輪車安全運転講習会の講師など、県内の二輪車の安全運転意識の普及・啓発活動を自主的、継続的に行っている。平成15年に二輪車安全運転指導員に認定されて以降、二輪車安全運転全国大会に出場する県代表選手のコーチ役を務めるとともに、安全運転指導員を目指す選手の指導を行うなど、将来の指導員育成も行っている。最近は講習会の主催や雑誌取材等に同行するなど、活動の幅が広がっている。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

二十歳の時に大型自動二輪車の免許を取得したので自らの運転技量を過信していた。免許証の書き換え時に二輪車安全大会を知り参加したが最下位に沈み、自分の運転技能や安全運転意識が未熟であることを思い知らされた。

その後、安全運転講習会に参加して白バイ隊員や安全運転指導員の指導を受け、技量とともに安全に対する意識を磨いているうちに、二輪車安全運転全国大会に鳥取県代表選手として出場するチャンスを得た。大会出場を重ね他県の安全運転教育の方法や情報などを知るにつれ、県内の二輪車運転者の安全運転技能の向上と安全運転意識の普及・啓発に尽力したいという思いが募った。また、かつて指導を受けた指導員への恩返しとして、地域社会に少しでも貢献できればと考え、平成15年に二輪車安全運転指導員の認定を受けた。

平成19年度に県職員として初の二輪車安全運転特別指導員に認定され、平成22年3月には、長期にわたる社会貢献活動の継続と優れた普及・啓発活動が認められ、優良二輪車安全運転特別指導員として、全日本交通安全協会から会長表彰を授与された。近年は雑誌取材の同行や地元企業の支援策などにも関わっている。

アピールポイント

（1）成果・効果 従来、県内の二輪車安全運転指導員は二輪車販売店関係者のみであったが、現在では本人をかわきりに他分野の指導員が認定されている。元代表選手たちも指導員を目指して研鑽しており、二輪車の安全運転意識の普及・啓発活動を推進する体制整備に貢献している。

（2）チャレンジ性 職員として採用された平成4年から自主的にこの活動に取り組んでいる。平成23年度に自動車教習所の協力や公益団体からの補助を受け、青少年対象の二輪車安全運転講習会を自ら主催して実施した。また、従来、県内の二輪車安全運転啓発活動は、「二輪車安全運転県大会」のみであったが、交通安全協会に働きかけた結果、平成24年度からは安全運転講習会の定期開催が実現した。

（3）波及効果 元々は趣味の延長からスタートした活動であるが、平成18年の中海一斉清掃時に二輪車関係者による海岸清掃活動のゲスト参加を仕組んだことで、主催団体との繋がりができた。その後県内で2回海岸清掃活動が実現したのも、このゲスト参加が大きな役割を果たしたと考える。このように情報発信や地域振興へも良い影響を与えている。

（4）協働 平成23年・24年は、地元の二輪車愛好家が企画した二輪車雑誌の取材や有名ライダーを招いた安全運転講習会、レーシングチームの誘致事業などのイベントに参画した。CO2削減と地元企業（電動二輪車製造）支援策として補助制度（24年度当初予算）にも参画した。また、レース（鈴鹿サーキット）に電動スクーターで参戦したチームにも同行し、チームのバックアップを精力的に努めた。

（5）継続性 職員として採用された平成4年から自主的にこの活動に取り組んでおり、ホームページの開設等による積極的な情報発信で認知度も徐々に上がり、現在では職場単位で講習会に参加する事業所もあり地域安全の向上に向けた取り組みが広がっている。



鳥取県中部総合事務所 1



鳥取県中部総合事務所 2



鳥取県中部総合事務所 3

[No. 130] 職業の特性を活かしたプロボノワーカーとしての活躍

前田 耕作 (長崎県 長崎市 広報広聴課)

長崎市より人事交流で派遣された佐賀県武雄市（H22～24 度）、一武雄市民として、こどもの居場所づくりを行なうグループ（任意団体）の立上りに積極的にかかわった。翌年には職業上のスキルを活かす『プロボノ』として、「プロジェクトマネージャー」を担当し、組織としての立ち上がり期を支援。効率的で目つ穏やかなチームビルディングを行い、職業や背景の異なる市民で構成するプロボノチームをまとめあげることに成功した。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

前田氏はH23年7月、市民との交流を深めようと、当法人主催ワークショップ『プチ起業交流塾』に自主的に参加した。子育て経験を活かした地域貢献を目指す仲間との出会いをきっかけに、自治公民館で開催するこどもの居場所づくり活動「よりみちステーションぼちぼちや」スタートアップに協力するなど、積極的に携わった。

翌年、佐賀県より受託実施した『プロボノ SAGA スタイル』において、『長崎市へ戻る時にも経験を持ち帰りたい』と自主的に登録し、職業上のスキルを活かすプロボノワーカーとして市民ボランティアをまとめるリーダー役として活躍した。担当プロジェクトは、立ち上がり間もない組織の基盤強化のためのマーケティング調査を4ヶ月程で行なうもので、地域に根付いた活動を目指し、自治会や公民館利用者等、地域住民の意見をヒアリングしまとめる作業であった。

『プロボノぼちぼちやチーム』は、4名のボランティア（会計担当の会社員、中間支援 NPO スタッフ、採用1年目の県職員、前田氏）で構成していたが、それぞれの仕事の特性や時間の違い方が異なることを素早く理解し、バランスを考えながらリードをとった。



P1012833

アピールポイント

（1）成果・効果 放課後のこどもの居場所づくり活動「ぼちぼちや」を立ち上がり期から知り、初年度は市民と一緒に活動し、次年度はプロボノとして公務員の特性を活かしながらチームをまとめ、間接的に団体を支えた。プロボノではメンバーの個性が十分に役割分担されプロジェクトがまとまることで、団体の支援が叶い、確実に基盤強化が進んでいる。現在は、県や市との連携し協働事例においても活躍している。

（2）チャレンジ性 人事交流で武雄市に3年間生活していた前田氏だが、仕事においてだけではなく、プライベートの時間においても積極的に一市民として関わりを持つ姿勢は、多くの市民との信頼を築いた。武雄市における「ひとづくり」「まちづくり」「市民協働」のパーソナルな関わりはこれに終わらず、商工会との「ちゃんぽん学会」開催、被災地支援活動「ワンラブ武雄」など幅広い。

（3）波及効果 前田氏の事例を知ること、様々な背景を持つ市民（ボランティア・役割）をまとめる実践の場として、仕事にも好影響する良い事例として、プロボノワーカー開拓に繋がっている。

（4）協働 一市民として NPO 主催事業への参加および市民活動への協力、翌年は、プロボノ参加による間接的な市民活動支援に関り、協働の大きな枠組の中に自らの身を置かれた。このことは、市民側にとっては影響が大きく、市民からは「将来、こんな職員さんが居ればぜひとも協働したい。」と声があがった。協働の大切な「思想」の部分において、まさに種まきをされたと思う。

（5）継続性 長崎市へ帰られてからの「プロボノ SAGA スタイル」での参加は物理的に叶わないが、初期段階から関係性ができている「ぼちぼちや」については SNS などでも気にされており、どこにしようと応援されていることが伝わる。今後は一長崎市民として、多くの長崎市民と共に汗を流し悩み、関係性を築かれることだろう。



P1013710



P1015880



[No. 131] 剣道交流活動、音楽普及活動、PTA及び学校運営協議会委員活動

瀬戸 要（佐賀県 健康福祉本部 医務課）

【剣道】地域の道場や近隣の学校に出向き、剣道を通じた様々な方との交流の他、子どもの指導や審判活動など青少年育成に取り組んでいる。アジアや欧州でも指導経験あり。

【音楽】地元のオーケストラの設立に携わり、自身もバイオリン演奏による音楽普及や、子ども向けのふれあいコンサート等も実施。

【学校】小学校PTA役員（副会長、父親委員長）として行事に関わるほか、学校運営協議会委員として学校運営等にも参画。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

【剣道】小学校から始め、生涯剣道を目指して日々稽古に励んでおり、「交剣知愛(こうけんちあい)」と呼ばれるように、様々な方との剣道交流を楽しんでいる。自分を育ててくれた剣道に恩返しをするためにも、指導者としての段位と指導者資格を取得し、日本の伝統文化普及と青少年健全育成の観点からも、国内外において、子どもや若者の指導にも取り組んでいる。

【音楽】大学で剣道部に入るつもりが、魔が指してバイオリンを始めてしまい、最初はコツがつかめず、夏休みご帰省して実家で練習をすると飼犬に遠吠えされる有様だった。今では地元のオーケストラで世界的プロと一緒に活躍できるまでになり、定期演奏会や子どものためのコンサート、地域おこしイベント等での演奏など行っている他、博物館や行政主催イベントでのアドバイザー的な活動も行うことも。

【学校】子どもの小学校入学を契機にPTA活動を開始し、父親委員長としてデイキャンプなどを実施し、現在は、副会長として全体のとりまとめを行っている。また、学校運営協議会委員として、地域コミュニティと学校が如何に連携するか、学校の運営目標や予算、学校行事をどうするかを日々議論している。



剣道



音楽

アピールポイント

(1)社会人10年目くらいまでは、趣味は仕事とは完全に別の「余計な物」という感覚がありましたが、最近はむしろ趣味や特技を通じた社会との関わりや人脈がなければ仕事思うように進まない、という感覚が強くなってきました。逆に自分の職場では何でもない日々のノウハウが、趣味の世界では異様なほど重宝されるという経験も増えてきました。

(2)私の場合は複数活動の同時並行のため、仕事（現在は医師確保）と家庭も含めた分刻みのスケジュールを余儀なくされることも多いです。年代的にどうしても、同窓会をはじめとする「〇〇会」の事務局が集中するのですが、さらに自治会の班長まで回って来たりして、「一体いつ仕事する暇があるの〜!」と泣きたくなることもあります。そのようなことも含めた「ムダ」

こそが、まさに仕事での新たな発想や活力を与えてくれると信じて、今日も「プラス・テン」活動を目指して精進しております。

(3)例えば剣道とオーケストラのメンバーは、ある意味で正反対の特徴を持ったグループです。PTAには、そもそも多様な方が参加されています。違う方との交流が多くあるからこそ、双方の違いや共通の価値観を理解できますので、各グループにおいてメンバーが悩んでいる際は、あえて異なる視点でアドバイスするなどにより、様々な取組をスムーズに行くとともにメンバーの資質向上にも寄与し、ひいては地域社会の向上に大いに貢献していると自負しております。

(4)例えば、県主催の障害者理解促進イベントや、東日本大震災で被災した一本松を使ったバイオリン演奏イベントの企画を担当職員と一緒に考えたり、小学校の運営をPTAのみならず学校運営協議会委員として「協働」活動をしています。

(5)楽しくて、もうやめられません!(笑)



学校

[No. 132] 踊る公務員、ひょっとこ踊りで地域を元気に、自らも健康に！

前渕 康彦（熊本県 玉名郡 和水町 経済課）

なごみひょっとこ笑福隊の事務局長、また、ボランティアインストラクターとして、本隊の事務と踊りの指導をしています。要請があれば、どこにでもお伺いし、地域を元気に、自らも健康にをモットーに、ひょっとこ踊りの笑いをふりまいています。本隊は、2010年8月、12人で発足しました。現在4年目を迎え、80人を超える隊員で楽しく活動しています。福祉施設慰問、イベント、祭り、結婚披露宴等の出演が主な活動です。



記念写真

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

活動に参加したきっかけは、熊日新聞にひょっとこのお面を作っておられる方の記事が掲載され、仲間と買いに行ったからです。また、とにかく、昔から人を喜ばすのが好きだったからです。

さて、和水町の春富に、七郎神という「性」の神様がいます。約800年前、農耕技術や種を伝授し、地域振興に大きく貢献した坂梨七郎衛門を称え、のちに塩井谷神社の祭神として祀られたものです。人々は「七郎さん」と呼び、五穀豊穡・種の繁殖の神様として崇拝されています。また、種は「出産」に通じることから「子孫繁栄」「安産」「家庭円満」の神としても崇められています。

一方、ひょっとこ踊りは、宮崎県日向市に伝わる伝統芸能で、「子孫繁栄」「家庭円満」「豊作」「商売繁盛」の願いを込めて、各種の祝宴等で

披露されています。

私たちは、ひょっとこ踊りを通じて地域の宝である「七郎神」を称えるとともに、笑いで地域を元気に、自らも健康になれるよう、なごみ流で楽しみたいと考えています。

毎月第3木曜日の午後8時から和水町中央公民館大会議室で定期練習を行っています。出演者数は、年間当たり延べ1,000人を超えています。

アピールポイント

(1)成果・効果

観る人に喜ばれ、感謝されるとともに、踊り手も自らの健康管理に役立つと考えています。

(2)チャレンジ性

熊本県北地域に初めて愛好会を結成し、ひょっとこ踊りの楽しさを広めています。約1年半前に、熊本県内のひょっとこ踊りの愛好会を集めて、イベントに出演しました。

(3)波及効果

なごみひょっとこ笑福隊の活動をご縁に、玉名市、山鹿市、荒尾市で愛好会が結成されました。町内においては、なごみひょっとこ笑福隊の活動が他の団体に刺激を与え、郷土に昔から伝わる米渡尾ひゅうたんまわしの復活につながりました。また、芸能活動を通じてまちづくりを考えるなごみ芸能団という若手集団も結成されました。

(4)協働

ひょっとこ踊りが大好きな住民が集まり、ひょっとこ踊りに打ち込み、人様に喜んでいただくことで達成感があります。まずは自分自身が好きなことに真摯に向き合い、努力することで、そういう人が集まり、同じ方向性を確認できると考えます。

(5)継続性

2010年8月に結成して約3年。毎月1回の定期的な練習も継続しています。2011年度、2012年度の述べ活動人数は、1,000人を軽く突破しています。



DSCO1340



DSCO1930

[No. 133] 音楽でまちづくり「ご当地ソング制作からロックバンド指導まで」

原田 靖士（熊本県 熊本市 市民協働課）

熊本市消防音楽隊ボランティア隊員エキベース奏者。

まちづくりの一環で観光誘致やご当地ソング、行政ソング等10年間で30曲以上作詞作曲。

女子小学生熊本応援バンド「Book Bear」を7年前に結成し現在4期目。音楽監督として楽曲の提供と演奏指導を行う。地域イベントに年間30～40回出演。

生涯学習の一環として公民館で中高年層対象のロックバンド講座を開催。約6年ボランティア講師として指導。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

高校卒業後プロ活動を少々。バンドが解散。平成元年天明町役場に入庁。熊本市合併後、12年間戸籍住基を担当後、平成15年まちづくり担当となる。（小中学校・地区・市・県のPTA役員を通算10年務める。）ある地域で「バンドを結成してご当地ソングをつくる」という企画が持ち上がった際、市担当者という立場で関わるも、楽曲制作や楽器指導などの予算不足をきっかけに中心的立場で参画することになった。以降、地域のご当地ソング制作に関わり、スタイルとして実行委員会をつくり、より多くの住民を巻き込んでいる。複数の鼻歌を繋げた作曲や言葉を募集して繋げた作詞、地元演奏家によるカラオケづくり、歌は住民1000人による録音、振り付けなどの企画を盛り込む。平成18年市の第3セクタである「熊本シティエフエム」の番組企画として女子小学生熊本応援バンドを結成。オリジナル約20曲、アルバムを5枚発表している。講座のマンネリ化打開を検討していた公民館職員の発案で始まった「初めてのロックバンド講座」（7回講座・年1回）は熊本市中央公民館主催事業として現在6年目。卒業生は100人以上。地域イベント等で活躍している。

アピールポイント

主な楽曲

1.行政ソング

10%の思いやり（熊本市役所節水キャンペーン＝2004年）、節水ソング（同）、2006年世界女性スポーツ会議ウェルカムソング（熊本市役所＝2005年）、Fifty Seven・国道57号線（国交省イベント＝2006年）、400年前の加藤さんのおうち（熊本城築城400年記念ソング＝2008年）、朝ごはんを食べよう（熊本市教育委員会企画＝2008年）、新幹線でくまもとへ（火の国未来づくりネットワーク2008年度優秀企画）、ビューティフルくまもと（熊本市政令市移行キャンペーン＝2009年）、もったいないよ～マイバッグ編～（熊本市レジ袋ダイエットキャンペーン＝2009年）、未来へGo!Go!（熊本市8020健康づくりの会＝2011年）、がんばれジャパニーズ（東日本大震災復興チャリティーソング＝2011年）、富合フォエバー（富合町合併特例区＝2011年）、わくわく都市くまもと（市制広報番組＝2012年）、走れ!熊本城マラソン（市主催イベント＝2013年）

2.ご当地ソング

帯山音頭（帯山校区まちづくり委員会＝2004年）、子飼商店街へ行こう（市立碩台小＝2007年）、サンパ尾ノ上かぞえ歌（尾ノ上校区まちづくり委員会＝2008年）、大イチョウ（市立黒髪小＝2013年）

3.地元企業連携

校区80（熊本シティエフエム番組テーマ＝2008年）、このまちに生まれて…（熊本シティエフエム番組エンディング＝2008年）、どうぞお願い（地元編集者企画交通安全キャンペーンソング＝2009年）、バスターミナル（熊本交通センター40周年記念＝2009年）、今夜のわたしは肉食系（JA菊池「菊池牛」CM＝2010年）、あなたのそばに…（地元フリーペーパーCM＝2010年）、安全安心ソング～防災編～（防災イベントソング＝2012年）



Photo_1



Photo_2



photo



浦崎 太郎 (岐阜県立可児高等学校)

地元小学校区で「まちづくり協議会」設立に参画。子どもと大人が一緒につくりあげるイベントを立ち上げる等、社会参画意欲や学力が高まる地域環境とは何かを模索しつつ、実践してきた。別途、行政職員有志とファシリテーション研修を重ね、行政と小中学校との橋渡しを通して総合学習等の充実に貢献。現在は、校外で培ったノウハウや人脈をフル活用し、地域再生と高校キャリア教育を一体的に推進するモデルの確立に尽力している。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ



総合学習企画ワークショップ (行政・学校・市民団体等の協働)

10年ほど前、氏は高校教師として学力低下問題の根源を探るうちに、地域の教育力低下やまちづくりの重要性に思いが至り、ファシリテーション技法を習得、地元へ飛び込んだ。同じ頃、人事交流で勤務した山間部の中学校でも、ふるさとを担う若者の育成を学校と地域が協働してすすめるNPOの設立に参画。「学習意欲の向上には、外遊びや大人との“共汗・共感”体験を通して、大人や地域に対する一体感を高めることが有効」と気づき、まちづくりと人づくりを一体的に推進できる仕掛けを工夫してきた。

その後、風通しのよい職場づくりを志向する県内公務員有志の会に氏を招待。夜な夜な研修を共にする中で、ある市職員が「総合学習を活性化したい」と相談。まもなく、行政・学校・市民団体等による企画組織が稼働し、それまででない魅力的な学習活動が実現。ファシリテーションが知恵を集める威力や、地域が学校に協力する意義を実感させてくれた。

通勤の都合上、現在は地元を離れ、勤務先の高校において地域連携に尽力。現地の市役所とともに、地域課題を解決する活動を通して自分や地域の将来を考えさせ

るキャリア教育の確立に努めている。

アピールポイント

1) 氏が手がけた事業では、例えば、地域を流れる川に全く無関心だった小学生が、川で思いきり遊びながら学ぶ活動を通して、河川環境の向上を大人に力強くアピールでき、さらには、川で遊ぶ様子を描いた共同作品が美術展で優秀な成績を収める等、子どもが意欲的になった例が多い。こうした実績は、身近な教育問題が実は地域の課題でもあり、しかも然るべき技法の習得により改善できる可能性を示すものであり、貢献度は高い。

2) 地域の教育力向上に教師が貢献したという事例をほとんど耳にしない中、氏の活動は、教師ならではの高い教育力を、地域に飛び込み、地域で発揮してきた点で特筆に価する。

3) 膨大な実践に基づく精緻な理論に照らし、個々の現場に応じた解決策を平易に提示できる等、連携事業に関する守備範囲が非常に広いため、氏には多様な相談が集まってくる。こうしたニーズを背景に、全国各地で講演・研修・交流を行う等、氏は普及活動も積極的に行っている。また、協働事業を通して向上した見識や技能は、自身が高校のキャリア教育でフル活用しているほか、活動を共にしてきた仲間からも、地域や職場(役所等)で顕著な応用実績を築く者が続々と現れている。以上、波及効果は非常に大きい。

4) 異質協働は氏が最も得意とするところであり、例えば、子どもが自然に親しめる地域環境をつくる教育的な価値を共同発信するシンポジウムの内容を河川関係者と共同で練り上げた実績をもつ。最近は一連の実績に基づき、高校・行政・専門家・市民団体等が「人づくり・地域づくり」を一体的に推進するビジョンを提唱。今年度は、勤務校と地元市役所が協働事業をいくつか試行する段階まで漕ぎつけた。

5) 残念ながら、個々の現場の継続性は氏の勤務先等に影響を受けているが、広域的な継続性は、氏の普及活動や、氏と活動を共にして実力を身につけた人物の増加により、着実に高まっている。



子どもと一緒につくりあげる地域イベント



勤務先高校において自治体職員と生徒のワークショップ

[No. 135] 聴覚障がい者とともに歩む手話サークル活動

明瀬 理恵（熊本県 天草市）

手話サークル（以下「サークル」とします）に所属し、サークルの役員として活動の企画をし、聴覚障がい者（以下「障がい者」とします）との交流活動や障がい者や福祉に関わる学習会に参加したり、地域社会に向けて、障がい者理解のための啓発活動もしています。また、研修会や講演会等での手話通訳、要約筆記を担当するだけでなく、通訳依頼のコーディネートをする通訳派遣担当もしています。



手話サークル（明瀬理恵 1）

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

昭和 63 年に教員として採用されました。初任地が聾学校だったため、障がい者の子どもたちへの授業、コミュニケーションなどすべてにおいて手話が必要でした。

「手話のできない先生なんて認めない」と言わんばかりの態度を、当時担任した子どもからつきつけられ、勤務終了後、手話を学び始めたのがきっかけです。

仕事に必要で始めた手話でしたが、交流や研修会に参加し、成人の障がい者の方々にたくさん励ましていただきました。明るく笑われ、年齢も男女も関係なく仲良くされている姿がとても輝いて見え、自分自身のもつ障がい者観を大きくひっくり返されました。その場に身を置くのが楽しく落ち着くことがサークル活動を続けられている理由で 25 年目を迎えています。サークルには現在、約 40 名の会員がいます。県

内各地に同名のグループが存在し、合同での交流や学習を続けています。

平成 3 年度には会長も引き受けました。現在は通訳派遣担当の役を担いながら、毎週火曜日、午後 8 時から 9 時まで市中央公民館でのサークル活動に参加しています。都合が合えば、通訳派遣の調整をするだけでなく、手話通訳活動を行っています。

アピールポイント

サークル活動は、障がい者との交流を通して、障がい者や手話、筆談等の多様なコミュニケーションへの理解、社会の不平等さを知る場となっています。そのため、一般財団法人熊本県ろう者福祉協会天草支部と共にあることを基本としています。手話を覚えるのは苦労しますが、会話ができた時の喜びを感じながら続けていく、仲間と共に歩む気持ちが大事なんです。

最近、施設に入所された障がい者の方がサークルへの参加を楽しみにされています。「サークル活動日は、表情が明るいですよ」と施設の職員さん。

「（手話という手段で）楽に会話ができる、コミュニケーションが取れることがいかに大切で素晴らしいことかをつくづく感じます」とも話されていました。

意思疎通ができないことは、聞こえない側だけでなく聞こえる側も同じことです。介護に関わる通訳依頼も増え、専門機関の方と関わる機会も増えてきました。聞こえる側は良かれと思ってコミュニケーションを取らず、手出ししてしまいがちです。そうでなく聞こえない人たちの思いを汲み取り、必要な時に手を貸すことの大切さを、障がい者介護に関わって気づかれたケアマネージャーさんがサークル活動へ参加されるなどの広がりもあります。

現在は、障がい者への緊急時等の情報保障についての協議を重ね、交通事故や急病等への対応に行政と連携して取組を始めたところです。さらに各種制度や情報が障がい者本人にきちんと届き、利用できるよう本人はもちろん、関係機関への理解啓発を図る取組の必要性を感じています。そのためには、もっと他機関との連携が必要だと思っています。

ですが、サークルは様々な立場の人の集まりで一度に多くのことはできません。できる人が、できるときに、できることをやっていく、それが障がい者が安心して暮らせる社会につながっていくので、今後も活動に取り組み、ともに歩む仲間の輪を広げていきたいと思っています。



手話サークル（明瀬理恵 2）



手話サークル（明瀬理恵 3）

和光市役所に勤める有志の仲間で、『わこまち探検隊』という自主研修グループを立ち上げています。自らの足で目で耳で、和光市内のグルメや、史跡・旧跡などの見どころを訪ね、紹介するとともに、色々な地域を訪ねて、見聞を広め情報発信をしています。現在は、商工会青年部有志や街の若者有志とも連携・協働し『わこまち未来創造研究所』という団体を設立、地域活性イベント活動も実施しています。



photo

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

市の職員研修活動に位置づけられた単年度の自主研修活動について、毎年様々なテーマで各々活動していた職員の一部が、その研修活動が廃止となった今も、真に自主的な自己研鑽の場として自主研修活動を行うため、有志として集い『わこまち探検隊』を立ち上げました。市の位置付の活動から脱し、全くプライベートでの自主活動として、最初は、和光市内のグルメ、史跡・旧跡、和光市の見所、イベントなど和光市の見所を、自分達の足で歩き、目で見、耳で聞き、手で触れ、自ら感じ、体験した和光市の魅力を、和光市内

外の皆さんに楽しく紹介・情報発信していくことを目的に、ブログを立ち上げました。ブログの開始から1年半が経ち、現在はブログでの紹介に留まらず、和光市商工会青年部有志の方や、地元三二FM局、CATV局、市内に在在する本田技研工業株式会社、独立行政法人理化学研究所、小惑星探査機はやぶさプロジェクトに参加した株式会社原田製作所など、地元の様々な方々と交流し連携を深めながら、和光市民の皆さん、あるいは和光市に訪れた皆さんと一緒に楽しめるようなイベントを企画し、和光市の地域活性化を、皆さんと一緒に楽しみながら実践しています。

アピールポイント

ブログについては『わこまち探検隊』メンバーが日替わりで毎日必ず1回以上を目標に、情報発信のための更新を行い1年半が過ぎました。和光市民の皆様を始め、市内外の事業者の方々、商工会、青年会議所、行政職員の方々に愛読頂いております。また、この活動を通し商工会青年部とも連帯感が生まれ、市職員と商工会青年部及び市の若者がイベント等において気軽に連携・協働していくという効果が現れました。その結果、それらの有志が融合し独自に地域活性イベントを企画・運営する『わこまち未来創造研究所』が設立されました。市や商工会では馴染みにくい企画や、小さな試みも独自の視点で自由に発想し、思い立ったら即行動する機動力を備え、2ヶ月に1回のペースで自らも楽しみながらイベントを実施しています。和光市の隠れた人的資産を発掘し、和光市出身の映画監督、和光市在住のアーバンデザイナー、和光市出身のフルートのソリスト、マリンバの世界的奏者、ヨーヨーチャンピオンなど多くの

方々と知り合うことができました。イベント例としては、市内の飲食店と連携し、市内を回遊しながら男女の出会いの場を提供する婚活イベント『WA@KO コン』は路上パフォーマーの活躍もあり、初めての企画としては大いに街を賑わし大成功を収めました。また、堅苦しい会議室を飛び出しアルコールを片手に“おとなの科学”を気軽に楽しむための『サイエンスバー』を企画し、市内の技術者や研究者に講演会をお願いしました。これは、市内企業の成果の発表の場でもあり、市民は、研究者の生の声を間近で気軽に聴講でき、おとなの科学の心をくすぐりました。この他にも、駅前ジャズフェスなど発想力と機動力で次々とイベントを展開してきました。これらの活動を通して、様々な人との信頼関係が構築されていき、結果として公の場でも円滑な関係を築くことができました。今も自分も人も街も楽しませる。そんな活動をしています。



和光市駅前 Jazz&Rock fes. in WAKO



シネマコミュニケーション

[No. 137] 職業の特性を活かしたプロボノワーカーとしての活躍

小林 圭一（佐賀県 武雄市立東川登小学校）

小林氏は小学校教員という職業柄必須な「教室運営」「マネジメント」のスキルを、仕事以外の場でも活かし地域貢献している。個性や経験を活かすボランティア「プロボノ」に興味を持つ個性豊かな社会人の集まりの中、チームのリーダー役として活躍。個々人の長所（個性）をみつまめ、適切にまとめ、人脈をつなぎ、職業の違いを壁と感じさせない活動でボランティアを率いている。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

小林氏は教員生活 20 年目の中堅となるが、仕事を離れた場所での地域活動や市民活動に積極的に参加している。H24 年度より当法人で受託実施している『プロボノ SAGA スタイル』には、様々なスキルや経験を持つ社会人有志がボランティアとして活躍しているが、氏は、未開拓のジャンルやエリアにおいても周囲をまとめあげている。

チームの中では、教員生活で培ったマネジメント能力を活かし活躍。昨年度（H24 年度）は『NPO 法人 佐賀県放課後児童クラブ連絡会』のプロボノチームにおいて、今年度（H25 年度）は『NPO 法人 SAGA アウトドアガイドクラブ』でのプロボノチームにおいて、プロジェクトマネージャーを担当している。携わったチームメンバーの職種・経歴は多様で、団体職員・教員・新聞記者など様々であるが、持ち前の洞察力とマネジメント力を発揮し、チームをリードしている。

その他、まちおこしグループ「武雄人倶楽部」として地域イベントへ積極的に参加、被災地支援グループ「ONE LOVE 武雄」としてボランティア報告会「おもちゃカフェ」の開催を呼びかけるなど積極的に地域住民をまとめている。

アピールポイント

（1）成果・効果 「プロボノ SAGA スタイル」では、プロジェクトマネージャーとして2年に渡りボランティアとして関わりを持った。プロボノワーカーをまとめるプロセスにおいては、関係する方々に的確なチームビルディングを行い、異業種間で多様性を受け入れ互いを尊重し合うことの大切さを示した。また、担当プロジェクトにおいても、常に相手の立場になった行動を心がけており、チームメンバーおよび支援先団体との信頼を構築している。

（2）チャレンジ性 初年度プロジェクトを終えた後、「よりよいマネジメントに挑戦したい」と、自ら2年目の挑戦に手をあげた。仕事とは直接関係のない「Web プロジェクト」であるが、持ち前の勤勉さで専門的知識を学びながら、自身の未開拓分野に挑戦している。

（3）波及効果 プロボノに限らず、様々な地域の場において、自らの個性を活かし地域貢献する教員が求められる。「教育」は学校現場だけでは成り立たず、児童に多様な価値観や社会の存在を知ってもらうことが大切である。小林氏のように、常に「社会」に目を向ける教員の存在は、これからの教育現場で求められる素質だと感じる。

（4）協働 教育の場でも「地域」との関わりが必要とされている中で、壁ができてしまいやすい「学校」という背景を持つ教員が、積極的に地域活動に携わることは、地域住民とのコミュニケーション形成においても大変喜ばしいことだと思う。学校と外とのネットワークづくりに寄与することで、今後の「学校との地域連携」においても、周囲からも必要とされる人材となることだろう。

（5）継続性 昨年から2年に渡り、時間を工面しながら「プロジェクトマネージャー」としてのボランティア活動を継続している。今プロジェクトは現在進行中であるが、プロジェクト終了後、そしてその後も、様々な分野、地域、市民活動において幅広く活躍されることを期待する。



小林さん1



小林さん2



小林さん3

大橋 志帆（群馬県 太田市 健康医療部 介護サービス課）

NPO法人スタッフとの情報交換や会員との交流を通して、対等な立場でNPO活動を支援する。NPO法人の「通訳」として、行政や関係機関等との橋渡しを行う。NPO法人の活動を発展させるにはテレワーク（在宅就業）の評価向上が必要であることから、情報共有や課題解決に向けたネットワークづくりを行う。多様で柔軟な働き方としてテレワークの必要性が高まっている状況を踏まえ、当事者意識でテレワークの推進に取り組む。



よこはま NPO 会計塾テキスト（横浜市民活動支援センター主催）

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

平成22年度太田市において、NPOと行政の協働として、ひとり親家庭等在宅就業支援事業を活用した業務委託を開始した。委託先はNPO法人在宅はたらき隊。事業は順調に進んでいたが、平成24年度に事業内容の変更があり、協働の趣旨から大きく外れる事態となった。次第に活動意欲をなくしていくNPO法人を見るにつけ、何とか元気づけたいとの思いから、個人の活動としてNPO活動支援を行うことを決意した。NPO活動全般に関する知識習得のため、NPOセミナーに参加している。（平成24年度～現在までに計7回参加）平成25年3月、NPO法人の活動PRのため、市長との懇談会を企画・開催した。月に一回、NPO法人との定例打ち合わせを行い、情報共有を図る

ほか、今後の方向性を協議している。NPO法人の活動を発展させるには、在宅就業という仕組みの評価向上が必要であると実感し、テレワーク推進を活動テーマに追加した。平成25年度は、ハローワーク太田所長との会談、テレワークセミナー参加、テレワーク第一人者・田澤由利さんのプロジェクト応援を行ったほか、長野県塩尻市振興公社を見学し、今後の協力体制やネットワークづくりを進めている。

アピールポイント

(1)活動が低迷していたNPO法人に対して、励ましの言葉をかけ続け、対等な立場で協議を重ねた結果、NPO法人の活動意欲が復活した。県の補助事業採択による活動資金確保や業務開拓に成功し、ひとり親等の自立支援に貢献できた。

(2)テレワークの推進は「働き方の変革」という難しい側面を持っているが、公務での業務経験や他者との調整力を活用し、ネットワークづくりを進めている。将来的には地域に貢献できるNPO法人としてソーシャルビジネス化を目指している。

(3)テレワークは、ひとり親や障がい者の自立支援だけでなく、出産・育児・病気・介護等による離職を防ぐほか、災害時の業務継続等、幅広い分野に活用できる仕組みである。メーリングリストでの情報発信を継続的に行うなかで、テレワークに関心を持つ人は確実に増えており、波及効果が期待できる。

(4)どのような活動をしたら良いか悩み、かつて研修講師としてお世話になったNPO法人（パブリックリソースセンターの代表理事（神奈川県職員））に相談したところ、「NPO法人を応援したいという熱意を失わずに、とにかく粘り強く、諦めずにやり続けていけば、必ず道は拓けます。」というアドバイスをいただいた。この言葉が大きな後押しとなり、今も活動の原動力となっている。ハローワーク太田所長からは、雇用・労働面での専門的な意見をいただき、NPO法人の活動改善につながった。塩尻市振興公社は太田市との共通点もあり、今後の強力なパートナーになるものと確信している。

(5)テレワークの有効性を情報発信し、ネットワークの拡大やNPO法人の「通訳」をすることが自分の使命である。次のステップとして、テレワーク第一人者・田澤由利さんの協力を得るための計画を策定中である。飛び出す公務員の活動は、人事異動に左右されず、ライフワークとして取り組むことができるので、今後も持続・発展させていく楽しみがある。



いただいた名刺



活動名刺

[No. 139] みらいづくり委員会残党 地域振興応援団

井上 雅平 (三重県 志摩市 うみぼうず館長)

野間 紀子 (三重県 伊勢保健所 総務企画室 総務企画課)

岡田 美千江 (三重県 津保健所 衛生指導課)

平成11年に三重県では多様な主体による「生活創造圏ビジョン」を策定し、住民・市町村・県の協働で、個性と魅力ある地域づくりを進める「伊勢志摩生活創造圏づくり」のために、さまざまな施策の実現にむけて活動してきました。この事業が終焉した後も住民・NPO等の、より自発的・主体的な事業への参画により、地域づくりの活動を定着させるために人的ネットワーク（きらり残党）により細々と地域振興の応援をしてきました。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

「伊勢志摩生活創造圏づくり」事業終焉後、不定期にメンバーがあつまり、各地域での地域振興事業への参加やお手伝いをしてきました。各地域のきらり千選をツアーしながら、地域の文化歴史を学ぶことから始まり、平成21年から皇学館大学文学部において、地域づくりをキーワードに演習形式で「みらいづくり残党メンバー」6人で「ビジネス実践既論」を4年間実施し、地域振興に対するやりがい等を講義することで若い人たちにも理解して頂きました。平成23年の震災の影響はこの三重県の海にも少なからずあり、多くの漁業関係への経済的な打撃がありました。しかしながら度会郡南伊勢町の「ないぜしぜん村」のみかん畑から望む五ヶ所湾は穏やかで、その時に自然への感謝と人々の絆によりきっと、時間が経たなくても復興ができると確信し、自然への感謝の意味を込めて、まったく一次産業に従事したことがなかった素人集団「伊勢志摩みらいづくり会（きらり残党）」が初めて米作りをしました。最初の収穫のお米を平成24年神嘗祭で奉納させて頂きました。食でもてなす「おかげ横丁」の店頭ご紹介販売させて頂きました。

アピールポイント

当時の南勢志摩県民局管内（現在の伊勢市・鳥羽市・志摩市・玉城町・度会町・大紀町・南伊勢町）で「きらり」と輝く伊勢志摩づくり事業に携わったメンバー（住民 有識者 市町村職員 県職員）がこの事業が終焉した後も住民・NPO等の、より自発的・主体的な事業への参画と、新

たな人材の発掘により、ビジョン実現のための取り組みを地域づくりの



伊勢の食文化フォーラム



2012051216 東京有楽町朝日ホールきらり田紹介ゲスト

活動として定着させるために人的ネットワーク（きらり残党）により細々と地域振興の応援をしてきました。財政的な後ろ盾を持たず、「金の切れ目が縁の切れ目」とならないように緩やかな人的ネットワークで地域振興の一端が担えないかと活動しているグループです。今回推薦したメンバーは地域振興の部署から異動しても、文字通り地域に飛び出し地域づくりに活動している行政職員です。各々は、地元のNPO「アイベ」（井上雅平）「伊勢志摩さいこう会」（岡田美千江）「伊勢志摩ふるさと交流会」（野間紀子）でも活動し、それぞれの団体を繋ぐ役割も果たしています。平成24年6月、メンバーの有識者皇学館大学の櫻井教授が、公益財団法人伝統文化活性化国民協会主催の「平成24年度式年遷宮記念シンポジウム伊勢とその食文化」のパネルディスカッションのパネリストを務めたことから、同じくメンバーの「ないぜしぜん村」の村長が保有する水田（きらり田）で収穫した玄米を株式会社マサヤさん・株式会社伊勢萬さんの御協賛のもとシンポジウムに参加された方に振る舞い、あわせて首都圏の方へ伊勢の食文化の一端を紹介させて頂きました。この時は、行政ならではの人的ネットワークと情報学のネットワークコラボレーションで成功しました。今後も、自らの活動と団体の活動をコラボし、地域振興の応援は続けていきます。※ 伊勢志摩みらいづくり会（きらり残党）民間メンバーは山出ないぜしぜん村長はじめ、NPO3団体、民間事業者3名、学識者2名



きらち田稲刈2

[No. 140] 下総神崎駅イルミネーション事業

澤田 聡美（千葉県 香取郡 神崎町 まちづくり課）

4年前からまちづくり課職員が、駅にクリスマスイルミネーションの装飾をしています。駅が普段とは違った「癒しの場」となり点灯式では年々町民の参加も増え、ステージでの演奏、出店など賑やかな楽しい場になっています。今年は小学校PTAも参加してくださることになり「楽しい」が更に広がっていきそうです。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

「発酵場を作りたい」町のあちこちに発酵場を作りたい。そしていつの日か町全体を発酵場にしたい…発酵場とは、米と水が発酵して酒になるように、大豆が発酵して味噌になるように、そんな微生物たちが発酵していくように、人も発酵する。みんながイキイキわくわく元気になるような場です。「駅にイルミネーションを点けたらみんなが喜ぶだろうなあ」そう思ってまちづくり課に提案したのが今から4年前の事です。町の予算は使わず、まちづくり課の職員が駅舎に登り取り付けます。ささやかな装飾も年々バージョンアップし、点灯式には子どもたちのハンドベル演奏や町のバンドの方などが出演してくださいます。商店の方たちの出店も年々多くなり、賑やかな点灯式となっています。4回目の今年は寄付をしてくださる団体も増え、行政と町民が一緒に作り上げていく…そんな行事となっています。



昨年の点灯式の様子

アピールポイント

「楽しいことを、ちょっと勇気をだしてやっちゃおう！時は待ってくれない」これが私のコンセプトです！楽しい事とは、まず自分が楽しみ、まわりも楽しくなるという事です。そして何かを始める時には勇気が必要です。勇気をだして行動する、時は待ってくれない…まさに「今でしょ！」です。

（1）成果・効果

いつもは素通りしてしまう駅も高校生が写メを撮ったり、孫を連れて毎日見に来てくれたりと駅が普段とは違う楽しい場になっています。

（2）チャレンジ性

町でイルミネーションは初めての事です。まちづくり課に異動して、私がやりたいと思い提案しました。町民が楽しみ癒しの場に、待合室が子どもから大人まで集える「たまり場」になってほしい…そんな思いからでした。なんでも最初に始めた人は様々な壁に当たると言います。そのとおりのいろいろな問題がありましたが、なんとか乗り越える事ができました。

（3）波及効果

行政から始まったこの事業ですが、点灯式には子どもたちや町の方が演奏してくれたり、出店する方も年々増え「発酵屋台村」ができました。「何か自分も一緒にやりたい！」そんな思いと一緒に町の人も動き出しました。

（4）協働

今年は小学校PTA「おやじの会」のお父さんたちがぜひ一緒に参加したいと言ってくれました。寄付をしてくださる団体も増え、このイルミネーションという一つの事業にまた新しいカラーが加わります。

（5）継続性

一人の「やりたい！」から始まったこの事業ですが「続けていく」には一人ではできません。皆さんの力のおかげで4回目を迎える事ができます。感謝の気持ちを忘れずこれからも続けて行きたいと思っています。この事業を通して、たくさんの学びがありました。やりたいと思ったら行動すること、小さな一歩がこんなに大きな「楽しい」に繋がりました。今年も今からわくわくしています。



保育所園児の「あわてんぼうのサンタクロース」



小学生のハンドベル演奏

[No. 141] 週末博物学者-ハタチの夢を形に-

菊原 勇作 (愛媛県 松山市 農林水産課)

普段は市役所で農政の仕事をしている応募者だが、週末は博物学者に変身。地域を駆けて生き物を調査し、そこで得た知識や経験を講演会や執筆物の形で地域に還元。学会やシンポジウム、自然観察教室といった個人では難しい事業は自身が役員を務める地元環境系 NPO の仲間と開催。NPO として市からの事業受託や共催事業の実績も。これらの活動で培った人脈を生かして、行政と地域の人材とのマッチングをワンストップで支援。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ



編集発行している NPO の会報誌

懸賞論文がきっかけで後に役員を務める NPO に誘われ、高校時代に生き物調査の道へ。生涯の趣味にすべく大学で専門教育を受ける。会社員と NPO の二足のわらじを履いていたが、地元市役所へ 3 年前に転職。転職後も兼業許可を得て NPO 活動を継続。

最初の飛び出し活動は、市が保管していたものの劣化し捨てられそうになっていた生物標本の修復。貴重なものが多数含まれていたため、市の担当課に働きかけ NPO で簡易修復の後、最終的に地元大学での修復事業を実現してもらった。今にして思えば物知らずの採用 1 年目職員だから出来た業。実績を認められ、2 年目には市が実施した(財)自治総合センターの環境保全促進助成事業を NPO で受託。子供向けの野外教室や地域住民向けの自然観察会で講師として奔走。現在は飛び出し活動を通じて知り合った

方の依頼で、他自治体での講演会や野外教室の講師も務める。

印象的なエピソードは、イベントの参加申込先として市の広報誌に載せた個人携帯に、それと知らずに上司が参加申込をしてきたことと、生き物調査をしていた市内の無人島が、某テレビ局の番組で開拓されて近寄れなくなったこと。

アピールポイント

(1)最大の成果は行政が地元の魅力を発見するきっかけを作ったこと。地元には有能な人材や魅力的な資源があったが、行政の認識は十分ではなかった。飛び出し活動の結果、市の他の部課から環境系事業についての相談を受けるようになり、自身の知識や人脈を活用して課題を解決したり、解決し得る人物や団体を紹介したりする形で貢献できるようになった。

(2)20 歳の時、環境行政への提言を政策論文(市のコンクールで最優秀賞を戴いた)として市に提出し、在野の研究者と協働して自然環境を活かしたまちづくりを行うよう訴えた。市の職員となった今、かつての自身の提言を実現すべく、先駆けとなって地域に飛び出している。最終目標は自然環境を活かしたまちづくり構想の中核となる自然史博物館の創設。

(3)生き物に行政界はなじみため、他の自治体や他の NPO の依頼を受けることも多く、その際には活動範囲に制限のない NPO の肩書きが活きる。そこで知り合った方と後に本業の農政業務で関係する事も。「知」の拡大再生産を狙って、市民向けイベントは子供を対象にしたものを多く開催。参加者の子供の中から将来の自然を生かしたまちづくりの担い手が生まれてほしい。

(4)市と NPO で契約を結び、市有地に生き物保護のためのネットハウスを建設。NPO の活動費には市の委託事業費の他に県や民間企業からの補助金も活用。人手のかかる市民向けイベントの際には、自然分野を専攻する地元の大学生を NPO でボランティアスタッフとして雇用。スタッフの大学生が後に NPO へ入会したケースも出ている。

(5)「無償ボランティア頼りの社会貢献は続かない」が長年の NPO 活動で身にしみたこと。NPO の事業ではボランティアスタッフにも出来る限り報酬を支給。自身も人事当局の理解により兼業許可を取得し、講師料や原稿料、印税など、活動の継続に必要な対価を得る仕組みを構築している。



拠点としているネットハウス



生き物観察会



[No. 142] 佐賀県庁アフターファイブ講演会

円城寺 雄介 (佐賀県 健康福祉本部 医務課)

「米経済誌フォーブスにも掲載された若き社会起業家の話が聞ける！」

いろんな分野で日本をリードする活動をしている変革リーダーの話の話を直に聴いてもらう機会をつくることで、彼らは特別な存在ではなく、ただ一歩を踏み出した人間だと肌で感じてもらう。忙しいと気づかない役所の外には無限の世界が広がっている。この講演会ではそういう地域へ飛び出そうとする公務員の背中をそっと押すような活動を行っている。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

主催者は救急車でiPad活用の政策を企画し導入を行ったことで、不可能と言われていた救急搬送時間の短縮に成功し、2012年にMCPCアワードでグランプリを、全国知事会先進政策創造会議では大賞を受賞。

「現場」を徹底的に回ったことが成功の大きな理由であったことから、公務員が現場へ飛び出せばどれだけの素晴らしい政策が生まれるかを身をもって体験し、仕事ではないアフターファイブの時間を使って現場へ、地域へ飛び出す仲間を増やそうと思いついた。

最初は県職員だけでやっていたがどうしても内向きになってしまいがちなので、ゲストを外から呼び刺激や気づきをもらいながら、参加者も県職員だけでなく、民間企業、学生やCSO活動者など、異業種交流的にして、さらに対話が生まれるように第1部を講演会、第2部は参加者同士で対話をしてもらう場にした。

これまで5回の講演会を開催し延べ350名の参加があった。講演テーマとなった「ICT活用」や「遠隔手話通訳」は県の政策に実際に導入されることになった。また、講演会をきっかけに実際に佐賀で地域活性化活動をはじめめる職員もあらわれるなど公務への波及効果も出ている。



活動の様子1



活動の様子2

アピールポイント

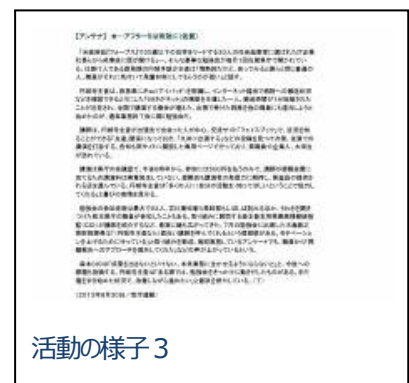
(1)成果・効果 講演会の参加者同士繋がりが生まれた。建設業の社長と肝がん治療の医師、人気菓子店のパティシエと県職員、など広い繋がりが生まれ、互いに世界が広がるとともに、講演会後もFacebookなどのSNSを通じて情報交換などを行うようになった。

(2)チャレンジ性 日本のiPad活用第一人者のSoftBank 中山五輪男氏、米経済誌フォーブスでも紹介されたシュアール代表大木洵氏、地雷撲滅や少年兵の社会復帰を東南アジアやアフリカで行っているテラルネッサンス創設者鬼丸昌也氏など世界的に活躍している人をゲストとして呼ぶことで、いろんな視点から刺激を受けたりモチベーションを高めてもらい、役所の外の世界へ関心をもってもらうような内容にしている。

(3)波及効果 講演会をきっかけに新しい政策が生まれたり、地域活動に参加する職員も現れるなど公務への波及効果も出ており、さらに他の自治体でもアフターファイブで自主勉強会を行うなど広がりをみせている。

(4)協働 当初は、主催者が単独で行っているイベントであったが、共感の輪が広がり、CSO団体との共催で、お互いに集客や周知、会場運営のノウハウなどを持ち寄り、参加者300名規模の企画をすることになった。

(5)継続性 講演会の周知や名簿の整理、会場の設営など、公務員が日中に仕事をしながらの開催はかなりの負担であるので、CSO団体と共催することで日中はCSO団体が対応し、人脈を活かしたゲストとの交渉は職員側で行うなど、お互いの強みや経験を活かした取組みを行っている。また、プラスワン活動であることから県の予算は使えないので、講演で共演した人などと仲良くなっておき、その後もFacebookなどで連絡を取り合い、たまたま九州へ来るときに講演をしてもらうことでコストを抑え、参加費500円程度で継続可能な活動となっている。



活動の様子3

[No. 143] 小中学生を対象とした地域の学習支援活動

樋口 克利 (兵庫県 西宮市 都市政策課)

西宮市の南東部に位置する小松地区で、地域住民、地縁組織と市役所職員有志が中心となり、小学校の児童を対象とした学習支援事業を毎週土曜日の午前に学習支援を実施している。また、学習支援以外に夏休みの工作教室やお菓子教室、スポーツ教室など、地域ニーズに対応した取りくみをおこなっている。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

(1)事業のきっかけ 本市の若手職員が学習支援事業の事業提案を行ったことを偶然知り、その内容が、常日頃地域課題と感じていた地域内での多世代の交流と次世代の担い手の育成という2つの課題が解決できる可能性があると確信し、私が所属する「学文エココミュニティ会議」の活動エリアの一部で、平成23年の6月に事業を開始した。

(2)事業の準備段階 まずは、事業予定地域の自治会長、小学校関係者、地域在住の教職員OB、子ども会関係者などにヒアリングを行い地域内での需要を確認し、同時に、地域の方から事業に対する助言や提案をいただいた。また、この趣旨に賛同した7名の職員とともに市内のサークルとして「学習ボランティアサークル」(現在：西宮まちづくりサークル)を立ち上げ、サークル活動の一事業としてこの学習支援事業に取り組むこととした。

(3)事業開始 事業開始に先立ち説明会を実施し、平成23年6月25日に学習教室を開始した。

(4)1年目の実績と現在 36回開催(延べ316人参加)

現在では、学習教室のほか、企業や専門家を招いて工作教室や料理教室、理科実験なども実施している。



RIKAJIKKENN

アピールポイント

(1)成果・効果

小中学校の週休二日制導入による教育格差の軽減に寄与と回覧板という広報ツールを用いた地域との連携により、学習教室への参加人数が以下に示すように順調に伸びている。

1年目：36回開催(延べ316名参加)

2年目：41回開催(延べ483名参加)

3年目：現在継続中

(2)チャレンジ性

この学習支援事業は、地域や保護者の理解、学校との合意形成ができれば実施できるシンプルな事業であるが、実際には、極少数の地域でしか行われていない。その理由は、地域全体の理解を得ることは多大な時間と労力を必要とし、簡単にはできないからである。しかしながら、今回、私たちは、この困難な事業にチャレンジした。

(3)波及効果

現在では、学習教室のほかには保護者も参加できる出張授業やスポーツ教室も実施し、地域全体に協働の機運が高まっている。また、マスコミに取り上げられ、他の地域からの問合せもある。

(4)協働

小学校区内の全自治会と青少年の育成協議会との協働事業として、学校の協力も得ながら地域全体の取り組みとなっており、学習教室の実施およびイベント等の周知は、自治会の回覧板と小学校の配布物で行なっている。

(5)継続性

平成23年6月から始めたこの事業も今年で3年目を迎えており、地域全体に浸透しており、将来的には、当学習教室の受講生OBが、子どもたちを教える立場になることも目標の一つとしている。

また、現在は事業への前向きな提案や地域の方の参加率も徐々に増えてきており、今後の継続性は十分期待できる。



RYOURIKYOUSITU



TUWJOUFUJKEI



[No. 144] 空き家から始まる商店街の賑わい創出プロジェクト nanoda

山田 崇（長野県 塩尻市（塩尻商工会議所出向中））

市役所職員で対話から行動を促すための意見交換会「しおラボ」を設立。「魅力ある商店街を考える」会において、「実際に空き店舗を借りてみなきゃわからない！」と、実際に空き店舗を借りる。この場所は nanoda（なのだ）と名づけられ、2012 年 4 月から活動がスタート。シャッター街化してきている地元「大門商店街」の空き店舗を市職員を中心に、メンバーが毎月 1,000 円を原資に空き店舗を借り上げ様々な活動を実施。



塩尻劇場「東座」前での集合写真

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

地域に入っていくきっかけとなったのは、ある事業があったからだ。2010 年、厚生労働省の安心こども基金事業「ひとり親家庭等の在宅就業支援事業」を若手職員が中心となり、企画提案し、2 年間で約 3 億円というソフト事業を完遂した。この事業を実施するにあたり、庁内若手職員 17 人で構成されるプロジェクトチームを組織。事業実施を通して、部署を超えて職員一人ひとりが持つ知識やネットワークを共有することの重要性を痛感し、それらは、コアメンバー含め皆が感じていた危機感や不安感を解決するための手段であると確信。その確信から、2 年間の補助事業終了後に、市役所職員で「対話」から「行動」を促すための意見交換会「しおラボ」を設立。毎月第 4 木曜日の午後 6 時から開催し、

現在までに市民公開の特別編を含め 39 回開催。転機となる第 17 回しおラボ「魅力ある商店街を考える」会において、「実際に、空き店舗かりなてみなきゃわからない！」とプレゼンし、市役所職員の有志を集め、実際に空き店舗をかりてみることをスタート。この場所は、nanoda（なのだ）と名づけられ、2012 年 4 月から活動がスタート。

アピールポイント

(1)4 年間空き店舗であった場所を掃除し拠点として整備。毎月恒例企画として①週末の朝、みんなで朝食を食べる「朝食なのだ」、②毎月 20 日(ワインの日)に、塩尻産ワインを楽しむ「ワインなのだ」を実施。それぞれの企画は、商店街の住人や若手後継者、市若手職員、信州大学の学生たちの交流を生むとともに、普段、商店街に足を運ばない、若者などが商店街の現状や課題を身近に感じる機会にもつながっている。

(2)メンバーに商店街の店主も加わり、現在 50 人で運営。会費は、建物の維持管理費のほか、建物回収のために積み立て、今年 8 月には入り口の扉がなかった空き店舗の改修を行い建物の維持に力添えて資産価値を高めた。

(3)一番力を入れている企画「空き家をお掃除なのだ」は、商店街に約 30 ある空き店舗の大家にお願いし、高齢者である大家さんが普段掃除が困難な空き店舗を定期的に掃除。そのうち 1 軒の大家から、無償で空き家を提供いただき、2 軒目の空き店舗（アトリエなのだ）運営につながった。また本活動が全国紙「TURNS」2013 年夏号の表紙を飾り 6 ページ特集されるなど、市外への情報発信につながり、岡谷市の若者が私たちと同様の仕組みで空き店舗を借りてオープンするなど、塩尻市近隣で 3 件の空き店舗活用へ繋がった波及効果がある。

(4)コアメンバーに商店街の若手後継者等が加わり、商店街の既存店（映画館、レストラン等）とのコラボレーション企画が実施されるとともに、和洋菓子店とパン店が新商品開発を行うなど事業所間連携も始まる。また首都圏の大学生のフィールドワークの場としても活用され、3 大学の学生が卒業研究のテーマに取り上げ、研究拠点としても活用。

(5)市職員だけでなく商店街の若手後継者をコアメンバーに加えることにより、商店街の当事者である事業主が自分ごととして本事業を認識しはじめ、今後の事業継続につながる兆しとなっている。



毎月第 1 火曜日開催「お誕生日会なのだ」の様子



nanoda（なのだ）の概観

[No. 145] 地球市民運動（国際交流・協力、地域づくり、青少年健全育成）

稲富 正人（佐賀県 経営支援本部 自治修習所）

人・社会・自然の相互依存を十分に認識し、いのちを慈しみ、強く・優しく・豊かに・美しく育てるという理念の地球市民運動を実践する市民団体に所属し、実行委員や里親、ホストファミリーとして、地域での国際交流・協力、地域づくり事業等に参加し、時に卓話講師など普及活動を実践してきた。

近年は、認定NPO法人の理事として経営に携わりながら、子ども対象のふるさとステイや海外スタディツアーなどに参加している。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

1984年に「日中友好九州青年の船」に参加し、県内外の事後活動に積極的に関わる中で、青年団などの仲間に触発され、地域活動に目覚める。

元来子どもが好きなこともあって1985年から「佐賀県ユースワーカー協会」で、キャンプファイヤーやレクリエーション指導など、青少年健全育成活動の一つの軸として取り組み、1992年から2年間、佐賀県青少年団体連絡協議会会長をするなどにより、他の多くの団体と知り合う。

またそのご縁で、大規模のウォークラリー大会や働く障がい者の運動会、佐賀市青年の家青年サークル連絡協議会など、数多くのイベントや団体に関わることとなり、人的ネットワークが形成される。

そうした中、1986年から「地球市民の会」の各種国際交流を通じたむらおこし活動や国際協力活動に実行委員として関わり、もう一つの軸として取り組んでおり、その活動は日韓友好武雄市少年の船などに繋がる。

他にも地元の子供会のクリスマスパーティのレクリエーション担当などをしたり、中間支援組織の「さが市民活動サポートセンター」の理事や「夢の学校」の監事など、無理のない範囲で活動をコツコツ続けてきた。



ミャンマー事業
(タウンジー・ナウンカセンター)



夏休み・ふるさとステイ
(佐賀市富士町関屋公民館)

アピールポイント

若い時は多くの団体の実践部隊としていろんな役割を担ってきたが、近年は、これまで培った経験や人的ネットワークを活かした、後継者育成や組織の持続可能な活動に軸足を移した活動を行っている。これまでの活動を通じて得た気づきや学び、感動を伝承するとともに、公務員だからこそ得意な県政や施策の情報提供や規程の作成、文章表現や監査面でのチェック、行政との付き合い方などを助言することで、NPOの経営支援や行政との協働の橋渡し役を担っている。

このように自分がこれまで関わってきた団体が行う運動により、多くの人と人となりがつながり磨き合うことで、その人たちが変わり、地域が世界が変わっていく。自分としては、こうした運動の一助を、その時々身の丈に合った分、コツコツと息長く続けてきた分だけ貢献できたものと考えている。

一方で、様々な分野の団体活動や異業種交流を通じて学んだ知識や技能、現場感

覚、多角的な着眼点、人脈は、職場の業務でも役立ってきた。例えば、施策として実施する青少年向け研修の運営や県民の海外派遣、職場の懇談会の雰囲気づくりなどがそうであるし、特に幅広い人脈があることは、講師等の仲介をはじめ、新規事業に対する事前意識調査や各種団体との連携・協働など、多くの部署でのいい仕事に繋がった。特に、国際交流課や男女参画・県民協働課に所属した際は言うまでもない。

障がい者を雇用する経営者から相談があり始めた運動会は、多くの団体が共鳴し、知恵と資源が集まったからこそ実現できたもので、その思いが受けつがれたからこそ10年以上継続できたイベントとなった。

地域に飛び出せば、郷土を愛する異業種や異文化の人たちと知り合い、価値観の違いを受容することや、地域や個人が独自性、個性をしっかりと持つ大切さなどを学ぶ。こうしたことを将来を担う青少年達をはじめ周囲の方に今後も伝えていきたい。



ハートフル♥さがリピック
(佐賀県総合運動場)



高木 保夫（長野県 花田養護学校）

諏訪湖の汚染が顕在化して、およそ半世紀になります。その浄化は、日本の湖沼全体のシンボリック課題でありました。長野県による浄化計画が実行されて約40年、ようやく諏訪湖自体の浄化傾向が目に見える段階に達しつつあります。諏訪に生まれ育ち、県職員となったぼくは、諏訪湖浄化を筆頭とする諏訪地域のまちづくり・活性化にかかわってきました。これまで25年間に、諏訪湖浄化を通して地域から教わったことをお伝えします。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

平成元年5月、諏訪市において住民の掲唱による「日独環境まちづくりセミナー」が開催されました。ドイツから水質浄化とまちづくりの専門家を招きました。事前に送付した質問書を元に現地視察に同行、住民・専門家・行政の三者が膝をつきあわせた7日間でした。このセミナーを通じて、今後より良い生活環境をつくりだしていくのに必要なことは、住民自らが積極的に学習、行動、提言することだと気づきました。その後もセミナー実行委員会を継続させて、さらに広範な関心ある住民を含む、まちづくり市民協議会に発展させようとの検討を得て、「諏訪環境まちづくり懇談会」（通称まち懇、以下同じ）が発足しました。当時、読書会の先輩からお誘いを受け、「長野県職員を選んだ一番の動機が、諏訪地域を元気にすること」であるぼくは、勇んで参加。まち懇は、「環境まちづくりの担い手は市民であること。ボランティア活動を通じて、諏訪地域の環境の改善とその発展を図ること」を基本方針とし、「オリンピックまでに泳げる諏訪湖に」を合言葉としました。平成19年高齢化とマンネリ化を解消し、会員層を広げるために解散。その後の活動は、諏訪湖クラブが継承しております。

アピールポイント

まち懇の主な事業は、環境まちづくりセミナー（5回）、関係機関および市民への提言（4回）、まち懇通信の定期発行、まちづくり現状地図・将来地図の作成、湖周バスの運行（7年）、低公害ハイブリッドバスの運行、講演会（6回）、諏訪湖チャリティウォーク（毎年）、諏訪湖流入河川24時間一斉水質調査、下諏訪ダムをめぐるシンポジウム、諏訪湖で泳ごう（5回）などです。まち懇での20年間に、ぼくは事務局・記録係→諏訪湖・水辺ゲルアリーダー→副会長をさせていただきました。7年目となる諏訪湖クラブでは、庶務担当理事です。

（1）成果・効果としては、これまでの「行政」対「反対住民」という関係から、意見の違いや対立が出て対立が埋まらなければ並立したまましていく。生活の質である友情を共有した、諏訪のまちを良くする平等な市民・同志という信頼関係を少しずつ醸成できたことです。

（2）チャレンジ性としては、公務員として培った記録力や調整力が活かしました。記録ノートは26冊に及びます。まち懇出身の首長も複数名誕生し、「まち懇はどう考えているか」と行政から意見を求められるようになりました。

（3）次に波及効果です。他地域では、24時間水質調査が諏訪湖から天竜川水系213km（静岡県）まで広がりました。40以上の企業・団体が参加しての諏訪湖・天竜川水系健康診断を、10年断行しました。他分野では、諏訪湖クラブから「自然エネルギー信州ネットSUWA」や「下水道エネルギー利用研究会」などの発足をみております。

（4）協働性としては、住民は諏訪湖に関係の深い旅館経営者、漁業関係者、農業者、商店主、大学教授、議員、会社員、主婦、建築士、公務員と多種多様でした。そうした会員と一緒に諏訪湖で、汗を流しました。

（5）継続性と言えば、「まちづくりは人づくり」です。ぼくらの代に出来なかった事は、若い世代へ愛着とともにバトンタッチです。



[No. 147] 先輩・仲間とともに「大好き大野・福井」盛り上げています！

林 順和（福井県 大野市 企画総務部 財政課）

名物ホルモン・とんちゃんを広めるため、「越前おおの“とんちゃん”を愛でる会」を結成し、ホルモンだけのフードバトル「とんちゃん祭」をはじめ、各種企画に取り組んでいます。

さらに、福井新聞社・福井銀行が立ち上げた「考福塾」第1期生として参加しています。

町内活動では分団体協理事長として運動会を運営するほか、青年会・育成会活動にも関わっています。小学校PTAでは副会長として参加しています。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ



とんちゃん新メニュー試食会（大野市・林）

○地元の名物ホルモン・とんちゃんをまちおこしに

大野市が「越前大野城築城430年祭」という年間通じたイベントを開催するにあたり、地元の若者へ参加呼びかけを行いました。それを受け市内青年団体メンバーが集い議論。その中で、みんなの意見が一致したのが「とんちゃん」を活かした地域イベントの開催でした。私は第1回大会から事務局長として関わりました。

とんちゃん祭は平成22年から開催し、これまで4回開催しました。全国のホルモンを食べ比べ使い終わった割り箸で投票、ホルモン日本一を決定するものです。会場には地元物産ブースも設置、市内宿泊業者の協力のもと、地元を盛り上げる活動として定着させることができました。

祭以外にも、市内飲食店とのコラボによる「とんちゃん新メニュー開発」なども進めています。

○福井の今と未来考える「考福塾」で自分磨き

福井新聞社と福井銀行が共催、東京で活躍する福井出身者の集まり「東京若越クラブ」などの協力を得て今年度立ち上げた「考福塾」。40歳未満のメンバーばかりが集まるこの塾の公募で採用され、協力企業の同年代と「福井の将来」に向けた議論を展開しています。



考福塾（大野市・林）

アピールポイント

○とんちゃんを愛でる会での活動を通して

(1)地元の名物ホルモン・とんちゃんを活かした地域おこしを同年代の若者と一緒に考え、議論し、事業展開していることで、地元の人に地元の良さを実感していただいている点

(2)メンバーそれぞれが自分の得意分野をフルに活かして会場設営等を行い、「とんちゃん祭」を開催している点

(3)夏の一大イベントとして定着し、大野市が進める「交流人口の拡大による地域活性化」の中心行事に発展している点。さらに祭に呼応して近隣商店による誘客・販促活動、宿泊業・飲食業への波及効果もある点

(4)気軽にとんちゃんを食べられるまちづくりを進めるため、飲食店に働きかけ新メニュー開発支援を先導している点

(5)とんちゃん祭は毎年楽しみにしている方が年々増加しており、平成22年以降すでに4年続けて開催している点。さらに愛でる会としてマスコミ取材に応じるなど、受け皿として継続的に活動している点

○考福塾第1期生として関わって

(1)福井の一流企業に勤めるメンバーとの徹底した議論により、自分の視野が格段に広がっている点

(2)メンバー唯一の「公務員」として塾に参加している点

(3)塾での議論によって生まれた企画を職場の若手メンバーに実際に提案し、大野市の施策に反映できないか議論している点

(4)福井で働くメンバーと公務員である私が、それぞれの強みを活かし企画提案をしている点（福井 Job Hopping※）

(5)この塾生としては1年限りの所属となるが、第1期生による勉強会・一期会（いちごかい）がすでに結成されており、今後も引き続きさまざまな観点での議論・交流を続けていく点

※福井 Job Hopping とは、子育て・教育の質が高い福井に子育て世代を移住させるため何ができるか考えたもの



第四陣とんちゃん祭（大野市・林）



[No. 148] 栃木市 UVA シンボル化プロジェクト

大塚 知幸（栃木県 栃木市 職員課）

地元のサッカークラブ『栃木ウーヴァ FC（以下「UVA」）』を応援し、UVA を栃木市のシンボルとして、市の一体感を作り出していくことを目的に、その実現のために様々な活動を行う、有志による市民団体です。

これまで①大通りへのフラッグの掲揚②ホーム戦（地元開催の試合）を周知する駅前・ショッピングセンターでのビラ配布③選手と市民の交流イベントの企画実施④視察、調査研究⑤情報発信等の活動を行ってきました。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

・スポーツを活用した街づくりに注目していた大塚さんは、2006年に市役所職員有志を募り「栃木市でJリーグを開催しよう！研究会」を結成しました。Jリーグのホームタウンの事例研究を行い、首長にスタジアム建設・クラブチームの誘致について提言を行う等の活動を行いました。

・2010年にそれまで地域リーグで活躍していたUVAがアマチュアサッカーの最高峰であるJFL（日本フットボールリーグ）に昇格すると、毎週、全国各地で行われる試合に出向いて熱心に応援するのはもちろん、ホーム戦の来場者により興味を持って観戦してもらえるよう、チームや選手の情報を掲載した小冊子（マッチデープログラム）の作成を買って出ました。

・こうした熱心な活動の中で、UVAが栃木市民に愛され、UVAが地元のチームとして根付いていくためには、広く市民のネットワークをつくって取り組んでいく必要を強く感じるようになり、大塚さんが中心となって、ウーヴァを応援してきた仲間と検討を重ね、2013年6月に市民団体「栃木市UVAシンボル化計画」を立ち上げました。



地元ショッピングセンターで子ども向けのキックターゲットゲームを実施し、併せてチラシを配る大塚君



フラッグ掲揚の段取りを説明する青いシャツが大塚さん

アピールポイント

プロジェクト最初の事業は「松本市および松本山雅FC」の視察でした。ここで参加者が目にしたのは、子どもからお年寄りまで一万人以上の観客がスタジアムに集まるまさに地域一体の光景でした。そして、大塚さんの意図は、それを栃木市で実現していきたい、ということにあるんだな、と理解しました。スポーツが持つ見る者に感動と興奮を与える力。『応援』で生まれる一体感や帰属意識の高まり。全国・世界に「栃木市」の名前を広げるチャンス。多くの皆様に観戦してもらうこと地域への経済効果。それを夢で終わらせずに、具体的な目的・目標として実現しようという強い思いを持って、このプロジェクトは動いています。

ただ、結成から約4ヶ月を経ましたが、最大の目標であるホーム戦での観客数アップで成果を上げられていないのが現状です。一方で、自営業、サラリーマン、公務員、等々様々な人々がUVAを応援していますが、その中から大塚さんの提唱するプロジェクトの理念に共感する仲間が、活動の中で少しずつ増えてきました。この活動はUVAや行政等から一切の経費援助をいただいていません。フラッグの掲揚を例にとると、資金集めから、地元商店会との調整、当日の掲揚、管理、片付け等すべて、プロジェクトが承りました。そうした手間暇も惜しまず活動に参加してくれる仲間の輪が増えてきたのが、現状において何よりの成果だと思っています。

そして、フラッグのように、今までUVA関係者の誰もが漠然と「あれ（いいな）」と思っていたことが実現できました。今後もそのプロジェクトが夢を実現し続けることができるよう、さらに仲間を広げながら今後も継続していきます。

そして、今までの活動には常に大塚さんがその熱気で周囲に影響を与えてきました。今後もその力を発揮していったほしいと思います。



フラッグ掲揚作業中

[No. 149] サル被害軽減のための住民主体情報発信・共有システムの無償運用

鈴木 義久（三重県 中央家畜保健衛生所）

NPO法人サルどこネットを県職員、地域住民等で運営。サル被害を軽減するため、住民が携帯電話を用いてサルの群れの位置情報を周辺住民にリアルタイムで発信・共有できるGPSシステムを運用。サル対策研修会などで熱意ある住民を発掘、地域のキーマンとして育成。平成24年度、三重県限定システムを全国対応版にバージョンアップ、セルフ方式で無償利用可能とする。また、罠罠捕獲されたクマの安全な保護・放獣を実施。



はじめて保護・放獣したツキノワグマ

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

平成15年の頃、サルやシカなどの農林水産業被害対策を対象にした民間調査機関は三重県内になかった。県行政内部においても、獣害対策を総合的かつ統括的に所管する部署がなく、住民に獣害の原因と対策を具体的に説明することが困難な時期であった。また、絶滅の恐れのある紀伊半島のクマが罠罠捕獲された場合、知識や対応方法がないため殺処分していた。

平成15年度にNPOサルどこネットを県職員、地域住民等で設立。獣害を軽減するため、住民が携帯電話を用いて情報を周辺住民にリアルタイムで発信・共有できるGPSシステムを開発、運用を開始した。被害対策の普及を図るため、県内・県外で開催されるサル

対策研修会講師等を務めながら、熱意ある住民を発掘し、地域の情報発信・共有のキーマンとして育成。いくつかの市町では常時サルの群れ情報等が提供され、駆除や追い払いなどの被害対策の要となっている。平成24年度、システムを全国対応とし、福井県鯖江市とその周辺市町や他の県で活用されつつある。また、100頭あまりしかいないとされる紀伊半島のクマの安全な保護・放獣について、この10年間で十数頭実施した。野生動物との共生を、普及啓発中。



追い払いをしないとサルが人に近づき、被害が拡大します

アピールポイント

成果・効果など：獣害対策の普及啓発により、サル被害をあきらめていた住民がみずからサルを追いかけるようになり、被害が軽減することで自分たちの個人の力、自治会等の地域の力を認識するようになった。住民にはなじみの薄い情報通信技術を扱いやすくして導入することにより、住民の調査活動が簡単にメールやHP情報となり地域住民にリアルタイムで配信されることにより、地域内での交流が進み、交通過疎とともに情報過疎を感じていた獣害発生地域の住民が、住民・行政と情報共有ネットワークを構築できるようになった。

チャレンジ性：最近の獣害対策ではあまり取り上げられなくなった古くから伝わる方法を再検討し、住民が栽培、加工、生産し、畜産農家等へ販売できる獣害対策のための地域産品を住民と検討中。捕獲されたサルの遺伝情報を京都大学霊長類研究所の共同利用研究施設で解析し、学会発表し、学術的にも展開。三重県内のサルの遺伝的調査と被害発生状況を比較検討し、三重県が今後群れごとサルを捕獲していく際に資するよう、遺伝情報指標を検討。

波及効果：大学や研究機関等が調査研究に活用するため、現地調査を行うとき、住民が蓄積した膨大なデータがいかに重要な資産であるかが再認識され、地域住民の誇りとなっている。獣害対策用に開発した電子機器が、養蜂家のクマ対策のみならず窃盗対策にも活用されるようになった。

協働：一般社団法人三重県猟友会と協働し捕獲個体からサンプルを採取。サルの遺伝情報のみならず、イノシシやシカなどから人間と家畜へ伝染するかもしれない病気についても岩手大学、岐阜大学、山口大学等の研究者と検討していく。

継続性：20年以上前から紀伊半島の一部でタイワンザルが繁殖し、ニホンザルと交雑し遺伝的かく乱が発生している。県内で確認されていないが県内で捕獲されたサルの遺伝情報を引き続きモニタリングし、交雑の有無を確認していく。



捕獲サルとメンバー まずは触れてみよう

福市 繁幸（佐賀県 労働委員会 総務調整課）

障害者のスムーズな地域生活支援体制確立のための福祉・医療・教育・文化等推進事業

特に、障害者のための諸活動が、高齢者、難病患者、発達障害者、精神障害者等地域でいきづらさを感じているすべての人たちのためになるという基本スタンスでチャレンジドフォーラムを企画・実施し、障害者フォーラムとしてはめずらしく障害の種別を超えた情報発信の場となっている。フォーラムは、政治と現場をつなぐ役割も果たしている。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

長女（S62生）が出産時の無酸素状態が原因で脳性まひとなり、現在でも寝たきりの重度重複障害者として授かったことが活動を始めるきっかけ。

障害者は幼児教育、義務教育、高等教育のすべての進学、そして卒業後の進路等人生の全ステージに壁があり、子の成長とともに壁を乗り越えようと活動。養護学校でPTA役員となり活動に拍車がかかる。大きな課題は、全国では8割近くで配車されている通学バスが佐賀県では配車されていないことや保護者控室がないのに医療的ケアの必要な児童の場合は母親が学校で待機してはいけないう問題だった。医療的ケア等の問題は行政の理解を得て解決。移動の問題は通学、卒後の様々な移動だけでなく高齢者等も使える公共交通の導入に向けて現在も積極的に取り組んでいる。卒後の行き先がない問題は、重度の障害があっても地域で生活できる拠点施設（スプリングひびき）を地域につくることで解消。

介護保険に比べ遅れてスタートした障害者自立支援制度が障害者の地域生活のためによりよいものとなるよう情報発信することを目的に障害者フォーラム（チャレンジドフォーラム）を開始し現在に至っている。



9thforum 会場内

アピールポイント

(1)金立養護学校PTA・保護者会長時代（平成9～15）には、学校内に障害児学童保育を行政の理解を得て開始。医療的ケアの導入も実現。

通学バス、医療的ケアの導入をめざし、所属団体の県肢体不自由児・者父母の会連合会（副会長（平成9～現在））を通じ、現場の声を行政・議会に届け、県議会に請願書を2本（医療的ケア・移送支援）提出、全会一致で可決。看護師による医療的ケアの導入は早期に実現。

・平成7年重度障害者小規模作業所開設。行政補助を受けるまでバザーで運営。その後、重度障害者のための拠点（生活介護、就労支援、居宅介護、GH）となる。

・チャレンジドフォーラムinさが実行委員会代表（平成16～現在）として唐津市で第1回大会（669名参加）を実施。以来毎年11月開催。財源は負担金と民間助成

・NPOをつくり障害福祉作業所の管理者研修、佐賀県主催バリアフリー映画祭等開催支援を実施。

(2)自助、共助、公助を基本スタンスとし、実績をもとに行政に訴え。

・学童保育は、県の教育施設を使い、行政（佐賀市、県）が事業を展開する全国的にも異例の取組み。

・医療的ケアは、導入の速さと規模で全国トップクラス。

・重度障害者GHは現在でも全国でまれ。

(3)学童保育、医療的ケアは、働く母親に不可欠で、県内全養護学校に普及。

・現場での活動を県障害福祉課での公務に活かし、重度GHを県重点施策として位置づけし、他の地域に3カ所目完成。

・地域活動やフォーラムで得た情報を県の各所属の公務で活かし、先進事業企画。公営住宅福祉利用等。

(4)学童保育は保護者、行政、NPOで協議会をつくり協働で運営。初代会長。

・フォーラムは各界有志集い、行政とも協働し情報共有。

(5)学童、医療的ケア、障害者の地域拠点づくり、フォーラムは現在も継続。

拠点は社会福祉法人運営とし、理事等（平成14～）として現在も運営に関わる。



重度 GH ひびきホームと音写真

[No. 151] 地域を知る→人を知る→地域をつくる→「飛び出すプロセス∞」

西尾 祥之（愛媛県 宇和島市 市民環境部 税務課）

拓己塾：官民共同の若者ボランティアグループ。地域の人の地域の魅力再発見が活動目的。ご当地検定、地域の祭りへの出店、各種マップの作成、ボランティアガイド、高校での授業等を実施。

SO-EN：地域活性化を目指したNPO。商店街を中心としたアートイベントや高校生との環境事業などを実施。

カタリバ in 宇和島：高校生に社会人や大学生と一緒に進路について考えてもらうキャリア教育プログラムを実施。



NPO 法人 SO-EN At Art Uwajima2013 (プレスア- in 商店街)

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

①地域を知る

名古屋出身でIターンをした私。まずは宇和島を知ることが公私ともに必要だと考えており、拓己塾の存在を知って参加。ご当地検定やマップ作成で仲間と市内を巡ったり、市史を読むなど、私の地域を知る取組がスタート。それにより課や役所を越えた出逢いも出来てきた時期。

②人を知る

4年目に市制初の東京出向。拓己塾で地域づくり団体全国研修交流会の分科会を担当するなど、取組を継続しながら、東京にて四国活性化を目指す団体(HIP)や私的な県人の集いなどに参加。仕事を越え世界を広げて様々な人と交流する中で、宇和島のPRを私的にしながら、人を通じてさらに愛媛・宇和島を知ることでもできた時期。

③地域・人をつくる

2年後に帰宇。拓己塾を継続しながら、①カタリバ in 宇和島のスタッフ研修や当日司会の担当、②宇和島青年会議所への入会、行政とのパイプ役としての活動、そして③NPO法人の設立(2013年3月)など、地域をつくる取組を、これまで出逢って繋がってきた人たちと開始。

拓己塾も少しずつ認知され「どうやったら入れますか?」と若いお母さんに尋ねられたことも…(学習「塾」と間違えられる(涙))

アピールポイント

(1) 地域の課題は、魅力の発信不足です。そこで、①地域の水産業の未来を担う水産高校生を対象に森と海の連環や自然を知ってもらうイベントの実施、②自分たちで2コース策定したまちあるきのガイドの実施、③瀬戸内国際芸術祭広域連携プログラムとなったアートイベントにおける各プレスリリースや集客、これらを通して市内外に宇和島を発信してきました。

(2) 市内の大名庭園の竹灯籠ライトアップでは、初めて夜間開放を実現しました。歴史上大名しか見られなかった景色に触れた市民の方からは、初めて足を運んだ、改めて魅力を知った等の感想をもらいました。また、お遍路さんに無料配布したお遍路マップの作成では、あえて不案内な部分を残し「わからなかったらききさいや(尋ねてね)」とおもてなし契機を生むコミュニケーションツールにするなど若者の新しい視点で取り組みました。

(3) 拓己塾のご当地検定に合格された地域のお年寄りは、自分たちで自主的に(勝手に!?)宇和島城のボランティアガイドをされています。

(4) 拓己塾では、事務(予算や事業計画等)は行政職員が、ものづくり(お祭りの遊具作製やライトアップの竹灯籠等)は、大工などの民間メンバーが中心となるなど相互補完で、協働しています。また、構成員がより多様なSO-ENでは、農家・漁師・飲食店経営者・教員が環境分野の企画、会社社長やJCメンバーがアート分野の企画や集客など、それぞれが得意分野で力を発揮する活動となっています。

(5) どの団体でも事務局を担っています。メンバーは文化や背景がそれぞれ異なるため、多々議論が噛み合いません。全体を見ながら、(ある意味)話を翻訳したり、意見を促したり、多様性という魅力を維持したまま、各自が心地良く楽しめるよう留意しています。参加している自分たちが楽しめない活動は広がらないので、まずはそれを継続への第1歩と捉えています。



拓己塾 ボランティアガイド「司馬遼太郎ゆかりの道をゆく」の様子



拓己塾 夜の天赦園・竹灯籠

地域に飛び出す公務員アワード2013スタッフ一覧

地域に飛び出す公務員を応援する首長連合事務局

事務局長 岩永幸三（佐賀県）

アワード班

企画・進行管理担当 茂田幸嗣（広島県）

募集要綱担当 津崎龍也（天草市）、寺島直樹（岡山市）

ウェブサイト・デザイン担当 梶谷彰男（鳥取県）

窓口担当 寺島直樹（岡山市）、胎中謙吾（奈良市）、津崎龍也（天草市）

審査担当 茂田幸嗣（広島県）

応募募集担当 西崎隼人（奈良市）

授賞式班

津崎龍也（天草市）、梅原恵子（長崎県）、胎中謙吾（奈良市）、西崎隼人（奈良市）



公務員よ！飛び出せ！やり出せ！頭出せ！